

中世後期南ネーデルラントの商業組織に関する考察 ： ロンドンのフランドル＝ハンザを中心に

藤井, 美男
九州大学大学院経済学研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/26264>

出版情報 : 経済學研究. 79 (5/6), pp.119-155, 2013-03-28. 九州大学経済学会
バージョン :
権利関係 :

中世後期南ネーデルラントの商業組織に関する考察

——ロンドンのフランドル＝ハンザを中心に——

藤 井 美 男

目次

はじめに —本論の課題と目的—

第1節 中世の商人組織に関する研究概観

—古典から21世紀初頭へ—

第2節 中世南ネーデルラントの都市ハンザ

(1) 個別都市ハンザの確認

(2) フランドル＝ハンザの検討

1) 2つのハンザに関する修正論

2) 史料とハンザとの出現期をめぐる諸見解

①史料論的概観

②史料の作成年代とハンザの形成時期

3) フランドル＝ハンザの構成—ハンザ

伯・楯持・調停人—

4) 交易対象地の確定

5) ハンザ料とハンザ資格

おわりに —仮説と展望—

史料

表

地図

文献一覧

はじめに —本論の課題と目的—⁽¹⁾

近世以降ヨーロッパの経済史的・商業史的膨張という大きな議論において、地中海や大西洋

(イギリスを含む)を舞台としたその動向がなお注目を浴び続ける中で、⁽²⁾20世紀末頃から今日にかけて、北海・バルト海を含む北方交易圏の重要性が再認識されるようになった(Wyffels, 1990, p.184, 1991, p.3).⁽³⁾しかもそれは、単に空間的な意味での重要性だけでなく、中小都市までも想定に入れたネットワーク論やアムステルダム(Amsterdam)を典型例とするゲートウェイ理論など、流通と取引に関する新しい理論装置を具備しての展開なのである。⁽⁴⁾こうした研究状況においては、近世に限らずそ

(1) 本稿では末尾に史料・表・地図・文献一覧(欧語・邦語の順)を配置し、史料と表は番号を、文献引用の際は著者名・年度・ページ数などを、それぞれ文中に挿入して示している。なお後年に採録された研究文献を参照した場合には、元情報にそれをカッコ書きで追記し、引用は後者のページ建てに拠った。

(2) その研究蓄積は内外学界ともに膨大である。ここでは、邦語で接近できる近業を幾つか挙げるに留める(服部, 1992, ビュテル, 1997, 諸田, 1999, 深沢, 2002b, 2007, ド・フリース, 2009)。

(3) この点、中世後期についてD.ニコラス(Nicholas, 2009)が「北方諸国」という括りで、経済史に限らず政治史や国制史に視野を広げて論じたことは記憶に新しい。なお、近世以降の北欧商業に関する比較的最近の研究としては、ティールホフ(2005), カービー(2011), 寺村(1988), 根本(2000), 井上(2002), 玉木(2008), 谷澤(2011)が挙げられる。

(4) ここでは詳細な点に触れるゆとりがない。差し当たり、ネットワーク論については、Blockmans(1996), Clark(1990), (1995), Stabel(1997), Van der Wee(1990)を、またゲートウェイ理論に関しては、C.レスハー(Lesger, 2001, 2005, 2006)および玉木(2008) p.26-33を参照されたい。

れに先立つ時期をさえ対象に据え、後述する A. グライフ (Greif, A.) や P. ミルグロム (Milgrom, P.)、C. ヘルダーブロム (Gelderblom, C.)、J. デイクマン (Dijkman, J.) などが、地中海世界も含め、商業や交易といった活動を歴史理論的立場から分析に付してきていることがすぐに想起される。

本稿は、以上のような学界潮流を念頭におきつつ、西欧中世における商業組織のあり方を (Wyffels, 1990, p.184)、南ネーデルラント地方のハンザ、とりわけロンドンのフランドル=ハンザ La Hanse flamande de Londres (以下、フランドル=ハンザと略称) と呼ばれる組織を主な対象として検討しようとするものである。⁽⁵⁾ フランドル=ハンザを選択する主な理由は、第1に、それが西欧でも最初期に形成された商業組織の1つであること (Van Werveke, 1953a, p.60)、第2に、ドイツ=ハンザ Die Deutsche Hanse と同様、個別の都市商人ではなく複数都市の商人たちから成る組織であったこと、である。グライフたちの考究対象ともなったドイツ=ハンザと並ぶ時代の商業組織とその活動について、比較を念頭におきつつ詳らかにすることの意義は大きいと信じる。⁽⁶⁾

以下では、ハンザや商人ギルドといったヨーロッパ中近世の商業史に関して、まずその学説史、特に20世紀末から21世紀初頭にかけて注目を浴びるようになった新潮流を軸に概観する。次いで、南ネーデルラントの初期的ハンザを取り上げ、実証的な側面において何がしかの新知

見を得ることで、そうした研究動向に対する一定の貢献可能性を探っていく。⁽⁷⁾

第1節 中世の商人組織に関する研究概観—古典から21世紀初頭へ—

ヨーロッパ中近世の商人ギルドやハンザという現象は、それらの実相 (活動実態=いつ・どこで・だれが・どのように) の解明、中世都市の初期的形成や成長への作用力、共同体社会におけるその役割など、社会経済的機能あるいは近代化の歴史的系譜への位置づけといった視点を軸に、批判や反論を含みつつも、古くから歴史学・経済史学の研究対象として取り上げられてきた。⁽⁸⁾

1990年代に入り、経済学においてゲームや契

(5) ハンザとは一般に、遠隔地商業を営む商人たちの結合組織である。それは、都市内での活動に主眼を置いて形成される商人ギルドとは、厳密には区別すべき存在とされる (Van Werveke, 1953a, p.81)。ハンザという語の意味と変遷については、Doehaerd (1951) を見られたい。

(6) ここではひとまず、ネーデルラントとの関係を強く意識しつつ、12世紀後半から17世紀半ばかけてのドイツ=ハンザについて概観した叙述 (Stabel, 2007, p.38-43) を見よ。なお M.M. ポスタンが (Postan, 1952b)、西欧中世の商工業史全体を俯瞰する中で、中世初期の北部商業における資本家的活動の盛衰の典型例としてフランドル=ハンザを挙げ、中世後期におけるその消滅とフランドル諸都市商業の受動化、ドイツ=ハンザやイタリア商人の進出・活躍とを対比して描いていたことも銘記すべきであろう。また、本稿の論点からは外れるが、中世後期南ネーデルラントの都市や農村の毛織物工業が、製品の輸出でドイツ=ハンザと提携することによって生き残り戦略を立てた、という興味深い議論があることにについても付言しておきたい (Dugnoille, 1977, p.141-142, Abraham-Thisse, 1993, p.177-179, p.201-202, 藤井, 1998, p.209)。

(7) 本稿で論じる商人組織ないし商人団体について、商人ギルドという表現を用いる場合もあるが、それはハンザを含め広義の商業活動主体を指している。

(8) そうした古典的業績として、H. ヴァンデル=リンデン (Vander Linden, 1896)、H. ビレンス (Pirenne, 1899~1939)、H. プラーニッツ (Planitz, 1940)、E. コールナール (Coornaert, 1948)、E. パウアー (Power, 1951)、E. ケアラス=ウィルソン (Carus-Wilson, 1952)、M.M. ポスタン (Postan, 1927~1973)、J.A. ヴァン=ハウテ (Van Houtte, 1953, 1977b)、H. ヴァン=ウェルヴェーケ (Van Werveke, 1953a·b, 1958, 1965) などの諸研究が挙げられる。

約の理論といった人間行動を定式化しようと試みる分野が脚光を浴びるようになると、商人ギルドやハンザがそうした領域での分析素材として改めて注目を集めるようになった。その代表的な研究者が、スタンフォード学派とも呼べるグライフやミルグロムといった人物であり (Greif, 1994, 2006, グライフ, 2009, Milgrom, 1990)、その主要な論点は拙著 (藤井, 2007a, p.1-33) においても言及した通りである。⁽⁹⁾

その概要を記せば、第1に、11世紀地中海で交易を行っていたマグリブ商人たち Maghribi traders の活動は、非対象な情報と遅いコミュニケーション、契約履行の法的執行の困難性、という環境下にあったが、彼らが取り結ぶ「結託」が「多角的懲罰戦略」の制度化を可能とし、マグリブ商人たちに契約履行問題や関係者の行動調整問題に対処することを可能としたということ、第2に、12世紀ポDESTA 制下のジェノヴァを取り上げ、その商業的繁栄の基礎となったのが、二極間エージェント=システム、つまり裁量を有すパートナーシップ制であり、①高給保証、②長期雇用、③支店間の短期移動、④モニタリング実施などの施策、および⑤最終保証としての都市国家による法廷を通じて、不正防止戦略としたということ、である。⁽¹⁰⁾

以上の歴史制度分析は、更に為政者による外来商人略取問題を解決するシステムの検討に移

る。その際取り上げられるのが、シャンパーニュ大市 la foire de Champagne やドイツ=ハンザである。外来商人がその権利を政治的支配者に侵害されないことを確実なものとする (=コミットメント) には、商人たちが多数で集团的報復ないし懲罰を行うことが有効であり、同時に、その確実性を高めるためには集团的懲罰に参加するべく互いに動機づけを行う必要がある。そこで、情報の共有と行動の強制を伴う商人ギルドという結合組織がそうした機能を有することになった、というのである。また他方で、前述した評価システムを補完するものとしてのコーディネーション制度、つまり商人ギルドと商慣習法 the merchant-law の存在も指摘する。匿名で不特定多数の商人が巨大市場で邂逅する場合、商人ギルドや大市法廷の存在が二極ないし多極評価メカニズムの不十分性を克服し、交易拡大のコーディネーションを果たす経済制度となることが強調されるのである。⁽¹¹⁾

2006年10月にユトレヒトで開催された研究集会でのテーマが、「ギルドの再来」Return of the Guilds とされ、2008年刊のその論文集においては (Lucassen, 2008)、故S.R.エプSTEIN (Epstein, S.R.) に代表される見地⁽¹²⁾——つまり前近代社会におけるギルド組織の技術革新ないし近代化における能動的な役割——が再確認されている。⁽¹³⁾

また、2009年8月に同じくユトレヒトで開催された第15回国際経済史会議において、M2セッションのテーマが、「金融・商取引における信用の役割」に設定され、そこではプリンシ

(9) ただしポスタンが既に1950年代に、取引技術と商機情報の不十分な中世イギリスにおいては、商業の組織化と商取引への投資という2つのことが必要であり、それにもとづいてパートナーシップ形態の取引が行われたとして、後述するエージェント問題へ連なる言及をしていたことは忘れてなるまい (Postan, 1957, p.519-540)。

(10) マグリブ商業の理論的・実証的分析に関して詳細は、藤井 (2007a) p.15-18、グライフ (2009) p.51-77および幾つかの最新の業績を見よ (Edwards, 2012, Greif, 2012, Goldberg, 2012)。

(11) 以上、詳細はグライフ (2009) p.79-105, p.266-299参照。

(12) エプSTEINの業績については、Epstein, 1998, 2008b をひとまず挙げる。

パルーエージェント間あるいはエージェント同士の信用実現が、金融・商取引の発達を促したことで、従って経済史研究には、どのような条件のもとでそうした信用が関係者の間で構築されたかを分析することが求められる、と強調されている (Murphy, 2009)。(14)

歴史制度分析を批判的に継承するこうした議論について、ここでは上記セッションで西欧中世について報告した、ユトレヒト大学のヘルダーブロムを挙げるにとどめるが、彼はノースウエスタン大学の R. グレイフ (Grafe, R.) とともに、185の商人組織を対象に1300年から1800年の間で50年ごとのデータを取って分析し、第1に、17世紀まで交易活動にとって市場や政治環境への適応に有効なのは、1つの最適な制度ではなく、1350年までに出そろう複数の商業制度の存在だったこと、第2に、商人ギルドは税や没収を避けるために支配者をコントロールする目的を持っていないこと (= 上記 A. グライフ批判)、第3に、逆に商人ギルドが支配者に対して、取引所設置や安全護送実施といった公共財を提供させるような動機付けを行ったこと、第4に市場の大きさがギルド形成を促すこと、の結論を導いている (Gelderblom, 2009, p.29-30)。

(13) そこでは主として手工業ギルド craft guild が対象とされるものの、H. ソリーの論文 (Soly, 2008) は商人ギルドにも言及し、その戦略が上層手工業者による商機参入 (= 交易活動における競争) を抑えることにあって、しかもそれに成功する限り、クラフト=ギルドが経済的効率性を有すか否かという問い自体が無意味であり、それが資本主義的成長の阻害要因であるとの無前提の議論を批判する。他方、T. ド=ムーア (De Moor, 2008) は、共同行為の主体としての商工業のギルド組織や農業における共有地経営システムが、社会経済的諸課題を解決する際に効率的な制度となっていくことを論じ、それは、中世盛期から後期にかけての西欧で「静かに進行する変革」だったことを強調する。

(14) 2012年11月現在、このM2セッションの会議録は出版されておらず、また、学会ホームページからプログラムへのアクセスも残念ながら不可能となっている。

これは、前近代経済における商業組織の意義と役割という観点から、商人ギルドの盛衰をブリュッヘ Brugge・アントウェルペン Antwerpen・アムステルダム の3都市について順次比較分析していた2004年の論文を補完するものといつて良からう。つまり、第1に (=ブリュッヘ)、13世紀までの商人ギルド形成の主要因は市場規模の一定の大きさに求められること、その際定期市と在地権力がその商取引を円滑・安定なものとしたこと、第2に (=アントウェルペン)、市場規模の更なる拡大とともに恒久的市場が形成され、そこで外来商人と在地商人とを取り結ぶ公証人や仲介人、商品倉庫などの出現を見ること、第3に (=アムステルダム)、遠隔地貿易の大幅な拡大とともに匿名多数商人の活動に対しても法的秩序が確立していくこと——つまり証券取引所の開設、公証人制度の拡充と仲介業の一層の拡大、政府(法)による契約保証制度の整備——である (Gelderblom, 2004)。

なお、紙幅の制約から詳細は割愛するが、掛売買 (= 信用取引) により時間的・空間的に分離された取引を、契約通りに相手方 (関係者) に履行させるシステムの問題、あるいは商取引の効率性の問題を検討する中で取り上げられる商人ギルドに関しては、他にも比較的最近の研究として、S. オギルヴィーや Q. ヴァン=ドースラール、デイクマンたちの仕事があることを最後に示しておきたい。(15)

(15) Ogilvie (2004), (2005), (2007), (2011), Van Doosselaere (2009), Dijkman (2011). 特に、デイクマンは、次節で言及するサン=トメールのハンザやフランドル=ハンザにも言及している点に留意すべきである (Dijkman, 2011, p.241-244)。

第2節 中世南ネーデルラントの都市ハンザ

前節で述べたような理論的新潮流を念頭におきつつ本節では、中世南ネーデルラントの商業組織（＝ハンザ）に関する概観的検討を、まず幾つか都市ごとについて見られたハンザ（以下、個別都市ハンザ）について行う。その上で、主眼となるフランドル＝ハンザの分析に移る。実はフランドル＝ハンザという組織については、史料上の制約もあって不明な部分が多く、19世紀末以来幾つかの議論を生んできたという経緯がある。しかしその中から20世紀後半には一定の見解が集約されてきてきている。以下では、それぞれの議論を回顧・整理することで少しでもその実像に迫りつつ、同ハンザの経済史的意義を展望してみたい。

(1) 個別都市ハンザの確認

南ネーデルラントにおいても、中世盛期以降に大きな展開を見せるドイツ＝ハンザ商人の活動はつとに高名で、K. パーゲル (Pagel, 1952) や Ph. ドランジェ (Dollinger, 1964) などの古典的著作はもとより、内外に多数の研究があることは周知の通りである。⁽¹⁶⁾ しかし他方で、南ネーデルラントでは既に11世紀から13世紀にかけて、主として対英通商を目的とした初期的な個別都市ハンザとでも呼べるような組織がまた存在していたことを忘れてはならない (Pirenne, 1899, p.69-70, Van Werveke, 1953a, p.63-64)。

(16) 前注6参照。また我国については次の諸研究を見よ。高村(1959), (1980), 関谷(1973), 高橋理(1974), (1980), (1992), (1993), 斯波(1997), (2010), 影山(1995), (2006), 玉木(2008), 谷澤(2011)。なお、本稿執筆途上で、ドイツ＝ハンザに関する最新の研究が上梓されることの報を得た(高橋理, 2013)。刊行を期して待ちたい。

この点で高村が、ドイツ商人のイングランドへの進出との関連で次のように述べていたことがすぐに想起される(高村, 1959, p.46-47)。「…イングランドにおいて、ヨーロッパ大陸の諸都市——ブリュージュ、サン・トメール、ケルン、おくれてハンブルク、リュウベック等——の商人は、早くからハンザ＝在英中間結成権を獲得した。そしてケルン商人のハンザ(団結権)は、1157年以来イギリス国王の保護が加えられることになったロンドンにある彼らの会所の所有と結びついたものであって、彼らは、ロンドン市民と同様の特権を享受するとともに、同じく市民としての義務が課された。その義務とは、一定の租税の納入、ロンドン市門(ビショップスゲート)の警備のごときを指すのである。」

他方、南ネーデルラント都市の初期的ハンザについては、ヴァンデル＝リンデンやピレンヌら19世紀の研究において既に言及がなされていた (Vander Linden, 1896, Pirenne, 1899, p.89-90)。ピレンヌによれば、複数商人によるギルド的結合が初めて確認できるのは、フランドル伯フィリップ＝ダルザス (Philippe d'Alsace) の1164-65年の特許状で、これはサン＝トメール (Saint Omer) の商人ギルドヘグラヴリヌ (Gravelines) とブルブル (Bourbourg) の商人を編入させる、という内容のものである。⁽¹⁷⁾ 1199年に伯ボードワン9世 (Baudouin IX) はヘント (Gent) と周辺都市に同様の特許を下付

(17) ただし、後述する《ハンザ料》という意味での最古の言及は、1127年4月14日フランドル伯ギヨーム＝クリトン (Guillaume Cliton) によるサン＝トメールへの特許状 (Derville, 1981, p.269-271) においてだとされる (Pirenne, 1899, p.68, 高橋陽子, 1992, p.270)。なお、この特許状は、前伯シャルル＝ル＝ボン (Charles le Bon) の暗殺後、フランス王寄りの新伯クリトンに対して諸都市が起こした叛乱を抑える意味合いを持っていたとされる。こうした政治的事情については、守山(1995) p.310-347, 西村(1997)を参照されたい。

し、ここでは複数都市の商人集団を意味する「hansa」の語が使用されている、という (Pirenne, 1899, p.84-85)。⁽¹⁸⁾そして、後述するフランドル=ハンザが出現する前に、ブリュッヘとイーブルが既にハンザを形成し、それぞれ複数集落をその下に従えていたことを想定したのだった (Pirenne, 1899, p.90-91)。

ピレンヌ以降 H. ヴァン=ウェルヴェーケが、50年代の論文でより掘り下げて南ネーデルラント全体のハンザに言及し (Van Werveke, 1953a・b, 1958)、更に1974年には E. ペロワが (Perroy, 1974)、1990年代には C. ウェイフェルスが (Wyffels, 1990, 1991)、フランドル=ハンザの再検討という視点から追加的考察を加えた。こうした研究状況から、中世南ネーデルラントの都市ハンザについて全体として次のように整理することができる。

恐らく11世紀に遡り、最初期と目されるヴァランシエンヌ (Valenciennes) のハンザ (Pirenne, 1899, p.84-85) を筆頭に、⁽¹⁹⁾遅くとも13世紀前半に出現するサン=トメール、⁽²⁰⁾12世紀末ライン地方への交易で知られるヘント、

1235年に同じく言及のあるリル (Lille) (Vander Linden, 1896, p.33)、そして1240年以前から存在が確認できるブリュッヘ (Warnkönig, 1836a, p.230)、1271年のミデルブルク (Middelburg) と1276年のメヘレン (Mechelen)、⁽²¹⁾そして14世紀初頭アントウェルペンの各ハンザを我々は見て取ることができるのである (Van Werveke, 1953a, p.68-77, Perroy, 1974, p.8-9)。⁽²²⁾

これらのうち、サン=トメールのハンザについては、ウェイフェルスの研究 (Wyffels, 1962a) へ依拠しつつ、高橋 (高橋陽子, 1992) が、ハンザ料の都市収入における公的な意義、手工業者層の離職後のハンザ加入実態、大商人層と都市貴族層との重なり合い、といった結論を導き出したことは、ドイツ=ハンザ以外のハンザ史研究というその位置づけとともに銘記すべきであろう。

以上のような個別都市ハンザを母体として、恐らく13世紀に入る前後に、前述したフランドル=ハンザと称される諸都市商人の結合体が登場する、というのがこれまで多くの研究者が認めてきた点である。しかしながら、その詳細な歴史像については従来の研究史でやや錯綜した議論が行われており、筆者は以前、拙著において若干それらに言及した経緯があるものの (藤井, 1998, p.91-92)、全体的な整理と考究はなお必要だと考えられる。そこで以下では、この商業組織に関して研究上の諸問題を浮き彫りにしつつ、掘り下げた検討を行ってみよう。

(18) ヘントへの特許状については、史料【1】を見よ。

(19) ただしウェイフェルスによると (Wyffels, 1991, p.14)、ヴァン=ウェルヴェーケ (Van Werveke, 1958, p.8-9) もハンザだと主張していたヴァランシエンヌの《ハンザの者達》「hanseurs」とは、「ハンザ料を支払って外国市場での交易権を獲得したギルド商人」を意味しており、商業団体としてのハンザと同定することはできない、という。

(20) サン=トメールのハンザについては、前述の《ハンザ料》への言及を重視すれば12世紀前半の成立を想定できるが、他方で、ヴァン=ウェルヴェーケの言うように、その商人ギルドの形成が11世紀末であることは確実だとしても、イングランド王ヘンリ2世 (Henry II) が1155年にサン=トメール商人へ商業特権を与えた史実を根拠にするならば、ハンザ組織の形成は12世紀半ばと考えることになる (Van Werveke, 1953a, p.68-69)。ウェイフェルスも、起源説には大きく踏み込まないもののやはり12世紀成立説を採っている (Wyffels, 1990, p.185, 1991, p.6)。

(21) ブラバント都市メヘレンのハンザ商人もイングランドへ赴いた。しかし彼らはギルド商人ではないと、H. ヨーセン (Joosen, 1935, p.402-404) の刊行史料を根拠にウェイフェルスは考えている (Wyffels, 1991, p.11)。

(22) 以上概要は表【1】を参照。

(2) フランドル＝ハンザの検討

1) 2つのハンザに関する修正論

1829年頃にリル文書館員の E.B.J. ブラン＝ラヴェンヌ (Brun-Lavainne, E.B.J.) が、また、1835年頃に L.A. ヴァルンケーニヒ (Warnkönig, L.A.) がそれぞれ、ロンドンのフランドル＝ハンザと称される組織に言及した史料を発見し、刊行した。⁽²³⁾

ヴァルンケーニヒと A.E. ゲルドルフ (Gheldolf, A.E.) は、それらを含めた史料集の編纂・刊行をする中で、当該2史料はロンドンのフランドル＝ハンザと呼ばれる商業組織に関連したもので、イープルとブリュッヘの各都市参事会が発給した一種の都市法 Statut だと考えた。しかもこのハンザは XVII 都市ハンザ la Hanse des XVII Villes と呼ばれ、ロンドンだけでなくシャンパーニュ大市での取引に従事していた、と述べたのである (Warnkönig, 1835, p.328-332, 1836b)。この見解を踏襲して、F. ブルクロ (Bourquelot, F.) もその著書において XVII 都市ハンザとフランドル＝ハンザとは同一組織であると考えていた。「… (シャンパーニュで取引をする) これらの都市は“ロンドンのハンザ” *la hanse de Londre* と呼ばれる組織を構成していたものと考えて間違いない。」 (Bourquelot, 1865, p.134)。またヴァンデル＝リンデンも、後述のハンザ形成時期に関する検討の中で、「このフランドル＝ハンザは、後に XVII 都市ハンザの名を名乗るようになる。」と断じていた (Vander Linden, 1896, p.28)。

その後フランドル＝ハンザを論文タイトルそのものにしたピレンヌは、上記2史料が同じ時代に作成されたものではないこと、両ハンザの

名称と交易対象地が異なること、構成する主要都市の所在地もフランドル伯領とフランス王国に分かれることなどの理由から、ヴァルンケーニヒに始まり、ブルクロ、ヴァンデル＝リンデン、そして C. ケーネ (Köhne, 1893b) といった研究者たちが両ハンザを同じものと見なしたのは誤りである、と断じていた (Pirenne, 1899, p.105-108)。⁽²⁴⁾

ピレンヌはこの点を掘り下げて論じることはなかったが、⁽²⁵⁾ H. ローラン (Laurent, H.) は、その南ネーデルラント毛織物工業史論の一断章として、ピレンヌの指摘を更に強調し、フランドル＝ハンザと XVII 都市ハンザが同じ組織ではないことを次のように述べた。かつてヴァルンケーニヒやブルクロが両ハンザを混同した原因の一端は、史料に記されたフランドル＝ハンザの加盟数が近似する、ということであろう。しかしながら、フランドル＝ハンザの加盟数が17になったことがあるという事実は、証拠立てられない。フランドル＝ハンザのイープル版ラテン語史料とブリュッヘ版フランス語史料との重複を合わせれば、確かに17になるかもしれないが (表【2】)、両史料の内容は同一時期の状況を反映したものではない、と。しかも同時代の

(23) Brun-Lavainne (1829), Warnkönig (1835) p.81-83, 83-85, (1836b). 史料の詳細については後述する。

(24) また、ピレンヌ論文とほぼ同時期にフランドル＝ハンザを検討した K. ヘールバウム (Höhlbaum, 1898, p.158) もピレンヌの指摘を妥当なものだと評価している。そしてこのピレンヌ説はその後多くの史家へ影響を与えることとなった (Doehaerd, 1946, p.51-52, Pernoud, 1948, p.142, Postan, 1952b, p.237)。ただし、ピレンヌが商人ギルドとハンザをほぼ同義のものとしていた (Pirenne, 1899, p.67-68, p.91-92) のに対し、後段で述べる理由によって、ヴァン＝ウェルヴェーケは商人ギルドとハンザとを同一視することはできない、と批判の眼を向けている (Van Werveke, 1953a, p.68)。

(25) 13世紀を通じてフランドル＝ハンザのイングランド交易での特権的地位を強調する論述の中でも、もはや XVII 都市ハンザとの異同は全く言及されていない (Pirenne, 1929, p.278-279)。

史料では《ハンザ》の語が冠されることはなく、単に《XVII 都市》としか記されないのだ、とも指摘していた (Laurent, 1935a, p.93, n.2)。(26) そして、フランドル=ハンザはイギリスからの羊毛輸入を中心とした組織で、XVII 都市ハンザはシャンパーニュ大市で毛織物輸出を営む別の組織だと明快に論じたのである (Laurent, 1935a, p.81, p.87-90)。(表【3】)⁽²⁷⁾

実は後述する通り、フランドル=ハンザに関する2史料の作成時期については別途慎重な考察が必要とされるのであるが、XVII 都市ハンザがシャンパーニュ大市向けの商業組織であるという所見は、その後 E. ケアラス=ウィルソン (Carus-Wilson, 1952, p.632) やヴァン=ウェルヴェーケによっても支持され、両ハンザが別の存在であるという点は今や疑問を差し挟む余地はないものとなっている。⁽²⁸⁾

2) 史料とハンザとの出現期をめぐる諸見解

① 史料論的概観

以下では、フランドル=ハンザに関する2つの規約史料について検討し、そこから浮かび上がる2つの起源論——史料とハンザ組織自身のそれ——について見ていく。まず史料論的概要から始めよう。前述した通り、ブラン=ラヴェ

ンヌとヴァルンケーニヒに始まる発見と刊行を出発点に、これらの史料については19世紀を通じて幾つかの刊行と考察が試みられた。⁽²⁹⁾ そしてピレンヌが、前述の1899年論文において、個別都市ハンザの研究史を整理した上でヴァルンケーニヒらの刊本を下敷きに、フランドル=ハンザへの加盟都市の変遷とハンザ料の意義とについて、後述するような検討を付したのであった。

その後50-60年代に入り、ヴァン=ウェルヴェーケが南ネーデルラントのハンザに関する研究を進める中で、ヴァルンケーニヒからピレンヌに至る2史料の解釈や刊行状況について、細かな修正を施しながら再度刊行し、それをもとに後述の大きな議論へと結びつけるに至った (Van Werveke, 1953b)。それによると、2史料とも原本は散佚とされ、リル文書館に伝来するラテン語版とフランス語版——以下それぞれイープル版・ブリュッヘ版と表記し、各条項は、Y1, Y2, B1, B2のように表示する——は、いずれも13世紀後半に羊皮紙へ複写されたものである。そして現存物は、2葉別々の羊皮紙をつなぎ合わせて1つの巻物形状を呈している。また同文書館には、これら13世紀版を転写した16世紀の版も保存されている、という。ヴァン=ウェルヴェーケは論文末に、13世紀版、16世紀版の細かな相違を注記しながら両史料を再構成し (Van Werveke, 1953b, p.310-320)、これらの決定版としたのであった (史料【2】史料【3】)。

(26) この点で、ヴァン=ウェルヴェーケは1953年の論文でローランに倣った見解を示していたものの、1958年にはXVII 都市に《ハンザ》の語が付加されるのは1344年が初めてである、として、その発展期を12世紀末頃としていた自説を修正している (Van Werveke, 1953a, p.77, 1958, p.98-99)。

(27) またピレンヌによると、シャンパーニュ大市で取引する組織としてのそれは14世紀末に姿を消すものの、名称だけは、ワロン諸都市の毛織物工業において《ハンザの罰金を課す》という、ある慣習に残されることとなった (Pirenne, 1899, p.108)。

(28) なお本稿ではXVII 都市ハンザの詳しい考察は割愛するが、これについては、Vercauteren (1950), Carolus-Barré (1965), Peeters (1984) を見よ。

(29) ヴァルンケーニヒの史料編纂などが独語で行われたためか、また、ギルド史研究に関するドイツの学界風土もあってか、19世紀にはドイツ人研究者による仕事が目立つ。ここではケーネとヘルバウムを挙げる (Köhne, 1893a, Höhlbaum, 1898)。19世紀中葉から20世紀初めまでの研究上の経緯について更なる詳細は、Pirenne, 1899, Van Werveke, 1953b, p.310-311, p.315-316 を参照されたい。

②史料の作成年代とハンザの形成時期

問題の2史料そのものには、作成された年代や時期に関する直接の記述はない。ヴァルンケーニヒらがラテン語のイーブル版がフランス語のブリュッヘ版より古いもの、という単純な想定を行って以来基本的にそれが踏襲されていた。その後これに具体的な推定を行ったのが、ケーネ、ヴァンデル＝リンデンそしてピレンヌであった。まずケーネが、1187年のフランス王フィリップ＝オーギュスト (Philippe Auguste) による伯領侵略と都市トゥールネの接収という経緯から、フランドル＝ハンザの形成を1187年以前とした。イーブル版史料で言及される諸都市のうち、トゥールネだけがその後も例外的にフランス領都市ながら、それ以前と同様にフランドル＝ハンザの一員として認められたのだ、というのがその主張で、イーブル版史料作成も1187年より前に遡るものと想定されていた (Köhe, 1893b, p.233-236)。

他方、ヴァンデル＝リンデンはケーネ説に一定の有効性を認めつつも、ハンザ成立を1187年以前とすることに決定的な根拠はなく、ブリュッヘ市参事会員選任規定に関する史料中での《ロンドンのハンザ》(史料【4】)という記述からその出現を1241年以前とし、またその年シント＝アンナ＝テル＝マウデン (Sint-Anna-ter-Muiden) という集落が、ブリュッヘによって都市と認められたことをもって、ブリュッヘ版史料の成立時期もそれと変わらない時期である、との修正を加えた (Vander Linden, 1896, p.31)。⁽³⁰⁾

上記ケーネとは全く別の根拠から、ハンザ成立の根拠を1187年という年に求めたのが、ピレンヌである。彼は、ハンザ加盟都市は週市を保有するものだけに限られている点を重視し、か

つポーペリンゲ (Poperinge) がフランドル伯フィリップ＝ダルザス (Philippe d'Alsace) により週市開催権を認可されたのが1187年であるという事実から、ハンザ成立はケーネとは逆に1187年以降であることは確かだ、としたのである。⁽³¹⁾ それゆえ自動的にイーブル版史料の作成も1187年以降ということになる。しかも、出現する都市名やその数の相違などからブリュッヘ版がイーブル版の単なる複写ではないと断言し、フランドル＝ハンザの勢力後退を防ぐために、ブリュッヘ版に見られる規約を新たに策定したのだ、と考えた (Pirenen, 1899, p.87)。そして、シント＝アンナ＝テル＝マウデンに関する前述のヴァンデル＝リンデン説を支持して、フランス語版は1241年3月以降に作成されたものとの結論を導いている (Pirenne, 1899, p.88-

(30) ヴァンデル＝リンデンは、明確にハンザの言葉は見られないものの、フランドル諸都市の毛織物工業を賞賛するギヨーム＝ル＝ブルトン (Guillaume le Breton) の文学作品 *Philippide* 中の文章を引用しつつ、1220年にはフランドル＝ハンザが存在していただろう、と述べる。また、ブリュッヘ版で言及されるシント＝アンナ＝テル＝マウデンが地域的重要性を持つのは、イーブル版に出るダンムよりずっと後であることをもって (地図参照)、イーブル版の作成が先行したことを想定している (Vander Linden, 1896, p.31, n.1, n.2.)。ただし前述の通り、ケーネとヴァンデル＝リンデンはいずれもフランドル＝ハンザと XVII 都市ハンザを混同していた。従って彼らのフランドル＝ハンザ起源論は、それを前提としていることに留意せねばならない。

(31) 週市開催権を根拠とするこうした議論にはハールバウムも同調している (Hölbaum, 1898, p.173-174)。なお、12世紀以前の都市形成に関連して記述されたピレンヌの以下の言葉「1096年に一特許状はディナンに、…その少し後、『カンブレ司教事績録』は…一商人が、数年の間に巨富を築くことに成功した物語を伝えている。その上、フランドルでは、ロンドン・ハンザのメンバーは純然たる商人でないとしたならば、何なのであろうか。1078年に…ケルン大司教に対する暴動を扇動した非常に豊かな商人…とは何であろうか。」(ピレンヌ, 1988b, p.166) を見ても、年代を特定することはないものの、彼がフランドル＝ハンザの形成を12世紀末以前と確信していたことは明らかであろう。そしてその拡大はブリュッヘを核として進行するもの、と想定されていたのである (Pirenne, 1899, p.85-86)。

89)。(32)

作成年代に異論はあれ、20世紀前半のピレンヌやローランの仕事までは、2史料がフランドル＝ハンザを現実に規定した、何がしかの規範的文書であるという認識に大きな違いはなかった。(33) これに対して、作成時期の推定とともに史料の性格規定についても全く異なった見地を提示したのが、ヴァン＝ウェルヴェーケであった。

前述した通り、ヴァン＝ウェルヴェーケはそれまでの刊行史料と語釈等に細かな修正と検討を施したのだが、その上で、両史料がフランドル＝ハンザの年代を異にする規約ではなく、イーブルとブリュッヘが内部で対立したため、ハンザの改革をめぐってそれぞれが同時に提起した一種の改革草案だ、と捉える。(34) 彼が再編集して示した各史料のタイトルに「草案」Projetとあるのはそのためである(史料【2】史料【3】)。そして、従来研究者たちが、両史料の内容の相違は史料作成の時間的乖離を示す、と考えたのに対し、内容の相違こそが両者の同時作成を示す、と全く逆の発想からの主張を行ったのである(Van Werveke, 1953a, p.62-64, 1953b, p.299-300)。

ヴァン＝ウェルヴェーケは言う。「フランド

(32) ただし、この年の復活祭暦を勘案するとこれは1242年3月に修正する必要がある、とヴァン＝ウェルヴェーケは指摘する(Van Werveke, 1953b, p.298, n.5)。なおローランも基本的にピレンヌ説を踏襲し、かつ両史料をフランドル＝ハンザに関する年代異版と捉えている(Laurent, 1935a, p.87)。

(33) ヘルバウムは、イーブル版を「イーブルのワイズテューム」Weisztum von Ypern, ブリュッヘ版をブリュッヘ参事会発給の「触書」Ordonnanzと捉えていた(Hölbaum, 1898, p.157, p.174)。W.スタイン(Stein, 1909, p.103)は、ラテン語版はイーブルによるハンザ規則集であるとし、両者をワイズテュームと見なすことに異論を唱えている。

(34) ウェイフェルスもこうした見方を支持していた(Wyffels, 1960, p.16, p.20)。

ル＝ハンザの2史料が、単なる現状記録ではなく、また、ハンザの慣習法の単なる成文化でもないことは確かである。イーブル版では、作成者によって“こうすべし”という文章の意図が読み取れるし、フランス語版では最後の段落で、“関係者による議論と承認が必要”ということを示す記述がある。従って、これら2史料は同時代に生じた問題に何らかの対処をなすべく作成され、関係諸都市に提示されようとした、いわば回状のように極めて動的な性格のものなのである。」と(Van Werveke, 1953b, p.297-298)。そして、リル文書館に問題の史料が伝来していたのもそうした積極的な理由によるというのだ。(35)

ヴァン＝ウェルヴェーケは更に続ける。フランドル＝ハンザは、ピレンヌが言ったような諸都市の単なる商人ギルド連合というよりは、ブリュッヘ＝ハンザの拡大版ないし、ブリュッヘが中核となって拡大した各都市ハンザの融合体と考える方がより適切である(Werveke, 1953a, p.68)。そしてその形成時期についても、12世紀に看取できるサン＝トメールのハンザを筆頭に、フランドル諸都市の個別ハンザが1200年頃には活動していたことを考えれば、フランドル＝ハンザの形成もほぼその時期と考えるべきである、と(Van Werveke, 1953a, p.64, p.80)。ところが、恐らくは後述するペロワ論文の草稿に接した後、改めてフランドルの都市ハンザを再検討する中で、サン＝トメールがフランドル伯領から離脱しアルトワ伯領へ属した1212年から、(36) ブリュッヘ参事会員選任規定の中に言及

(35) 両史料に記述された都市名と数が相違するという事実も、これらの史料がハンザ加盟者の完全なリストを構築するという目的や性格を帯びていないことを示す、という主張もこれに加わる(Van Werveke, 1953a, p.66)。

がある1241年までの間をフランドル＝ハンザの起源とするべきだ (Van Werveke, 1958, p.97)、と自説に修正を加えたのであった (史料【4】)。⁽³⁷⁾

そして、2文書が同時期のものとすれば、ブリュッヘ版のシント＝アンナ＝テル＝マウデンへのあの言及から、その最も古い作成年代を1242年3月とし、また、ブリュッヘ版におけるハンザ料収入の記述 (史料【5】)の結果として、ブリュッヘ会計簿へハンザ料収入が記帳され始める1285年 (詳細は後述)を最も新しい時期と想定できる (史料【6】)、と結論したのである (Van Werveke, 1953b, p.309-310)。⁽³⁸⁾

さて、史料の性格やその起草時期、フランドル＝ハンザの組織形成時期を検討するに際し、南ネーデルラント側の史料を分析するだけでは限界があることを鋭く指摘したのが上述のペロワである。ペロワは、2ハンザの峻別、2史料の同時期作成とそこに垣間見られるハンザ内部の混乱ないし対立という、ヴァン＝ウエル

ヴェーケへ至る以上の先行結論を一応の前提とした上で、イングランド側の Calendar of the Patent Rolls, Calendar of the Close Rolls, Calendar of the Liberate Rolls といった諸史料、およびドゥエ (Douai)に関する G. エスピナの諸研究 (Espinass, 1913, 1930, 1933)に依拠しつつ、フランドル＝イングランド間通商に看取される4つの画期 (1240、1261、1270、1275年)をそこから読み出すことによって、フランドル＝ハンザの形成期とその背景事情について次のように斬新な見解を提示したのである (Perroy, 1974)。

1240年以前に、通商連合としてのフランドル＝ハンザが形成された直接の証拠はない。しかし他方で、先に見たような個別の都市ハンザがあまた存在したことも疑いない。⁽³⁹⁾ そうした中1240年以降イーブルとドゥエを軸とした対英通商が活発となっていった。⁽⁴⁰⁾ ところが1254年、ヘンリ3世 (Henry III) がイングランド側の規格に沿わないフランドル製毛織物の販売禁止と、ノーサンプトン (Northampton) 年市での没収を宣言したため、フランドル側の猛烈な抵抗を呼び起こすこととなった。そしてこのことは、その後長く続くごたごたの発端となったのである (Perroy, 1974, p.10-11)。

1261年以降イーブル・ドゥエを軸とした既存の協商体制に、ヘント・カンブレ (Cambrai)・ディクスマウデ (Dixmuid)などを加え、十数都市による通商連携 alliance が実現した。1270年までにイングランド側史料の中で言及されるブリュッヘ商人の頻出度を見ると計5度で、そ

(36) この点については、高橋陽子、1992, p.55, n.7を参照。

(37) ウェイフェルス (Wyffels, 1960, p.19) もこの見解を支持していた。ただし、この修正に関連してヴァン＝ウエルヴェーケ自身はペロワの実名を挙げることはなく、単にフランス人史家のテキストを参照したとしか述べていない (Van Werveke, 1958, p.88)。しかもなぜかそのペロワ論文の発表は、ヴァン＝ウエルヴェーケの自説修正よりずっと遅れて1974年である。彼はその論文末尾で、「ヴァン＝ウエルヴェーケにフランドル＝ハンザの起源を13世紀後半とする自説を紹介したが、この主張については同意を得ることができなかった」と述べている (Perroy, 1974, p.18, n.1)。奇妙なことに、この間の事情はウェイフェルスの91年論文での簡単な叙述によって知ることができるのみであり (Wyffels, 1991, p.15)、しかも、フランドル＝ハンザとサン＝トメールのハンザを中心に概観した90年の論文では (Wyffels, 1990)、ウェイフェルスはペロワ論文に全く言及していない。

(38) 13-14世紀西欧の商人ギルドやハンザに関わる史料について概観した H.R. ヴァン＝オムロン (Van Ommeron, 1978, p.32) も、この見解をほぼ踏襲している。

(39) 同時にペロワは、ローラン (Laurent, 1935a, p.86-95) や F. フェルコーテレン (Vercauteren, 1950) を引用しつつ、1230年に XVII 都市ハンザが出現したことを主張する (Perroy, 1974, p.7-9, n.2.)。

(40) イングランド王宮がこの2都市商人から高級毛織物の輸入を大量に行った事実が見て取れる、と言う (Perroy, 1974, p.10)。

れは、ドゥエの19度、イーブルの17度（その他合計41度）に比べ極めて小さい。このことは、フランドル＝ハンザが1270年以前にブリュッヘを軸として成立していた、という旧説と矛盾する。むしろ当時は、ブリュッヘが対英通商連携から疎外されていた印象が強いのだ、と強調するのである（Perroy, 1974, p.11-12）。

更に1250年代に遠因を持つ、1270から1274年の通商危機の状況を見ても、⁽⁴¹⁾ 禁輸措置で大きな被害を受けたのは、ドゥエ・イーブル・ヘントのみと言って良く（Perroy, 1974, p.13）、⁽⁴²⁾ エドワード1世が発給したフランドル伯ギイド＝ダンピエール（Guy de Dampierre）への賠償請求と安全護送に関する1277年11月28日の史料（Calendar, 1893, p.247-248）で言及されるのは、イーブル・ドゥエ・ポーベリンゲ・ディクスマウデであり（史料【7】）、ブリュッヘヤリルは登場してこない（Perroy, 1974, p.12-13）。⁽⁴³⁾ こうしてペロワは、フランドル＝ハンザの設立契機をこの時の通商危機に求めていく。つまり、それまで対英通商で有力な地位を占めていた上

述の諸都市が、1270年代の危機をきっかけに勢力を低下させ、他方で、既に周辺都市と一定の協力関係を構築していたブリュッヘが頭角を現し、ドゥエとイーブルの覇権を掘り崩すべく自らを中核とする拡大ハンザを形成していったのだ、というのである。⁽⁴⁴⁾

従って、フランドル＝ハンザの正式な形成が対英通商回復の1275年以前ではあり得ない。⁽⁴⁵⁾ ペロワは、前述した1277-78年の安全護送への言及と、フランドル＝ハンザから排除されたドゥエとハンザに加入したリルとの間に勃発した1284年の紛争、またイーブルに対するブリュッヘの覇権確立を示すとも言える、1285年ブリュッヘ会計簿へのハンザ料収入記載（史料【6】）という状況から、フランドル＝ハンザの確立は1278年と1284年の間に違いない、と結論づけたのであった（Perroy, 1974, p.15-16）。⁽⁴⁶⁾ 他方、例の2史料の作成時期については、ブリュッヘ版成立に関するピレンヌ説以来の論拠——つまりシント＝アンナ＝テル＝マウデンへの言及——と、ヴァン＝ウェルヴェーケ説を採用し、「問題となっている2つの史料は、1242年から1285年の間に作成されたものと結論づけられる。」と述べる（Perroy, 1974, p.5-6）。⁽⁴⁷⁾

管見の限りでは、フランドル＝ハンザに関する

(41) 前述したヘンリ3世期の毛織物新規格問題が、フランドル女伯マルグリット＝ド＝コンスタンチノーブル（Marguerite de Constantinople）による英国商人財産の没収——税を払っていないというのがその理由である——を端緒として1270年代に再燃する。これはエドワード1世（Edward I）によるフランドル諸都市への羊毛禁輸命令発布を招き、1274年に一応の和解協定が行われたものの、フランドル伯側からの賠償支払い問題がこじれ、1280年代にまで混乱と対立が持ち越されることになった。なお、当時の通商・政治危機に関しては差し当たり、Berben, 1937, 1944, Wyffels, 1962b, Lloyd, 1977, p.25-40, Nicholas, 1992を参照せよ。

(42) それでもドゥエとイーブルはセント＝アイヴス（Saint Ives）年市での毛織物販売許可を得ている、という（Perroy, 1974, p.12）。これについて詳細は、Moore（1985）p.24-35を見よ。

(43) ペロワは言及しないが、既にヘルバウム（Hölbaum, 1898, p.157, n.2）がペロワの言う5都市体制（ドゥエ・イーブル・ヘント・ポーベリンゲ・ディクスマウデ）のことに若干触れていることは銘記しておきたい。

(44) その際、イーブルとその周辺集落をブリュッヘの拡大ハンザへ含めることでイーブルを第2の地位に留め、逆にドゥエをほぼ完全に葬り去ったのだ、とペロワは強調する（Perroy, 1974, p.13-15）。後述の役職者選出に関する考察から、ピレンヌもイーブルはフランドル＝ハンザにおいて第2の地位を獲得していたと述べている（Pirenne, 1899, p.90）。

(45) 1275年頃ドゥエが、規格外とされたその毛織物を以前と同様に英国内へ輸入できるようエドワード1世へ単独で嘆願した事実がある、ということもその論拠に含まれる。つまり、その時点でドゥエがフランドル＝ハンザから排斥されていたと想定するのだ。なおこの嘆願書については、Espinass（1913）t.3, no.633, p.474-475を見よ。

る最新の研究はウェイフェルスの91年論文(Wyffels, 1991)である。その主眼は後述する通り、ブリュッヘ会計簿に記されたハンザ料の意義を探る点にあり、ハンザの起源について明確な主張を行っている訳ではない。しかも、ヴァン＝ウェルヴェーケとペロワの見解を示しながら、13世紀前半にロンドンで活動したハンザが史料中明確に看取できるのは、ドイツ＝ハンザとアミアン(Amiens)・コルビー(Corbie)・ネール(Nesle)のフランス都市の各ハンザだけであるとして、フランドル＝ハンザについて史料上のはっきりした痕跡がないことを改めて確認している。とはいえ、ウェイフェルスの全体の論調から言うとハンザの起源については、ヴァン＝ウェルヴェーケの説——1212年～1241年とする——を支持したかつての見解(Wyffels, 1960, p.19)を保っていると考えられる。

以上を整理しよう(表【4】)。まずフランドル＝ハンザの組織としての確立時期については、12世紀末以降とするピレンヌ他の古典説、ヴァン＝ウェルヴェーケらのように13世紀前半とするもの、そして13世紀第四四半期とするペロワ説の3所見に大別される。他方、問題の2史料の作成に関しては、ハンザ成立との同時代

性を唱えるのがケーネやピレンヌ、ペロワであり、別時代だとみなすのがヴァン＝ウェルヴェーケである。そして、ピレンヌたちが各史料の作成には時間的差異があると考えのに対し、ヴァン＝ウェルヴェーケは両者同時の起草を主張する。

このように見てくるならば、両史料の出現期に関する見解の相違は、それらがフランドル＝ハンザの成長期に作成されたのか、変革期ないし後退期に作成されたのか、という視点の違いから出ているということが分かる。⁽⁴⁸⁾ いずれにせよ、フランドル＝ハンザの出現と2史料作成の時期については、全く新たな判断材料がない限り現時点で確定することは不可能である。ペロワ説は一定の説得力を持つものの、古典説以来積み重ねられてきた議論と、それらを補強する間接的な証拠とを全く無視する訳にもいくまい。従って、勃興期と成長期を経たフランドル＝ハンザが、13世紀半ば頃解決しなければならない組織運営上の困難に遭遇し、2つの改革案を起草し関係諸都市へ提示したのだ、というヴァン＝ウェルヴェーケ説がペロワ説と同質の方向性を示しており、今のところ最も妥当なものだと言えよう。⁽⁴⁹⁾

(46) しかも伯ギイ＝ド＝ダンピエールのイングランド寄りの姿勢に起因した、フランス王フィリップ＝ベル(Philippe le Bel)軍の1297年の侵略を契機に、フランドル＝ハンザは姿を消すという(Perroy, 1974, p.17)。つまりピレンヌ以来の見方とは全く逆に、ペロワ説は組織としてのフランドル＝ハンザの歴史を極めて短期的な現象としか見なしていないことになる。なおこれに関連して、ウェイフェルス(Wyffels, 1962b)が、1270-74年のフランドル＝イングランド通商危機の際、双方での資産没収額を精密に査定し、それ以前からのフランドル能動的商業の後退とイングランド商人やドイツ＝ハンザ商人の早期の台頭を主張している点にも留意しておく必要があろう。

(47) 従って、ペロワが2史料の作成とフランドル＝ハンザ自体の形成との直接的な関連の有無をさほど重視していないことは明らかであろう。

3) フランドル＝ハンザの構成—ハンザ伯・楯持・調停人—

さて以上のような学説的経緯を念頭において、フランドル＝ハンザについてまずその組織

(48) しかもそのことは、フランドル＝ハンザの形成理由あるいは存在意義とは何か、というそもそもの疑問へと結びついていく。この点については後段で述べることとする。

(49) 13世紀中葉に英国王がフランドルの各都市へ発給した特許状では確かにフランドル＝ハンザという文言は出現しないが、そのことは必ずしもその不在を意味しない(Van Werveke, 1958, p.10)、という主張を見よ。

構成の概観から検討を始めよう。

このハンザには、運営統括と法廷を担う2つの重要役職があったことが知られている。第1が《ハンザ伯》«hansgraf, comes hansae, quens de le hanse»であり、第2が《楯持》«scildrake»と呼ばれるものである(Pirenne, 1899, p.93-94)。(50)前者はいわばハンザ組織の長であり、そうした職位は13世紀前半のリル(Köhne, 1893b, p.244)や14世紀前半サン＝トメールのハンザ(Wyffels, 1991, p.6-7)においても看取される。(51)

ピレンヌは、ハンザ伯がブリュッヘ商人の中から、楯持がイーブル商人の中から各1名選出される役職であり、ハンザ集会(52)を開催する際に後者が不在でも、ディクスマッデ・アールデンプルク(Aardenbourg)・リルの代表者いずれかがその代理をすることができた、とごく簡単に述べる一方、楯持は、略取された同胞商人の物品がイングランドで発見された場合、それ

を保管し持ち帰る役割を担っていたことを指摘する(Pirenne, 1899, p.94-95)。

これに対し、ヴァン＝ウェルヴェーケは更に次の如く敷衍して述べる。ハンザ伯になれるのはブリュッヘ商人に限られ、その出席がハンザ集会の成立の必須要件であること(史料【9】)、従ってハンザ伯は固定した人物ではなく、集会毎にその場でブリュッヘ商人から選出されたこと(Van Weveke, 1953a, p.66-67)、楯持もイーブル商人に限定された役職ではあるものの、集会時イーブル商人が不在の際には、ディクスマッデ・アールデンプルク・リルあるいはオウデンプルク(Oudenburg)の商人のいずれかが代理指名されうること、そしてそれら諸都市の商人が一人でも参加していれば開催可とされたこと(Van Werveke, 1953a, p.67, 1953b, p.301, p.303)、である(史料【10】史料【11】)。(53)

第3に見て取れるのが《調停人》«arbitres» «inventores」という職である。これは、ハンザ伯・楯持とともに、各ハンザ集会で商人による不服・異議の申し立てを受ける法廷構成要員だとされる(Pirenne, 1899, p.94, Van Werveke, 1953b, p.301-302)。通常の申し立ては、まず、当該商人が所属する都市の法廷に持ち込まれることとなっており、それを受理するのが、恐らく都市参事会にも名を連ねていたであろう、フランド

(50) ピレンヌは「scildrake」を《旗手》とも別称し、フランドル＝ハンザが隊商組織であったことを改めて主張している(Pirenne, 1899, p.94)。また、ペロワは楯持の文言から、フランドル＝ハンザが武装していた可能性も指摘する(Perroy, 1974, p.5-6)。なおブリュッヘ版史料には《書記》«clers」の記載もあることに留意したい(史料【8】)。

(51) リルでは極めて早い時期の1235年以前に4人のハンザ伯が知られるが(Vander Linden, 1896, p.33)、それは、当初私的組織だったハンザの長が都市の役職者に性格を変えたものだ、とウエイフェルスは考えている(Wyffels, 1991, p.7, n.13)。またサン＝トメールのハンザについては、14世紀前半まで2名の長が様々な名称で呼ばれ、ハンザ伯という記述が明瞭に出現するのは1317年以降である、という(高橋陽子, 1992, p.274, p.275, n.7)。

(52) フランドル＝ハンザの集会は、交易対象地のイングランドやスコットランド(後述)だけでなく、地元でも開催され、それは直近のフランドル年市が終了した後とされた(Van Werveke, 1953a, p.66-67)。ただし、フランドル＝ハンザには固定した根拠地というものは存在しない(Wyffels, 1990, p.185)。なおフランドル年市について詳細を述べる紙幅がないが、差し当たりVan Houtte(1953), Jansen(1982)p.159-161, 山田(2001)p.77-110を参照されたい。

(53) 代理の楯持選任に関しては、イーブル版でリルとなっている部分がブリュッヘ版ではオウデンプルクとなっている。しかもピレンヌは、「楯持の代理選出に関する規定はフランス語版にはない」(Pirenne, 1899, p.32, n.3, 1939, t.2, p.175, n.2)と述べていたが、実際にはヴァルンケーニヒ(Warnkönig, 1836b, p.509)とヴァン＝ウェルヴェーケの編纂史料いずれにおいても、フランス語版第2項の中で明確に叙述されている。ただし史料編纂者のヴァン＝ウェルヴェーケ自身は、論文中これに言及した箇所「フランス語版第3項」(Van Wervek, 1953b, p.301)と誤記している。こうした彼らの誤謬については不可思議としか言いようがない。

ル＝ハンザの調停人ということになる。この文脈においてピレンヌは、週市を有するハンザ所属都市すべてがこの裁判特権を享受したことを強調する (Pirenne, 1899, p.96-97)。⁽⁵⁴⁾ 他方で、他のフランドル都市や交易対象地において例えば、ハンザ資格のない者が行った売買に対する告発と審判は、上述した5都市選出の3役職者がそろってハンザ集会の場として行われ、⁽⁵⁵⁾ 有資格の立証に失敗した被告人は保証金を失い、その保証人を務めた者はハンザ資格を失うこととされた (Pirenne, 1899, p.95-97, Van Werveke, 1953b, B6, p.318)。⁽⁵⁶⁾

しかし、先に見たように2史料の同時起草とその重要性を主張するヴァン＝ウェルヴェーケは、週市特権を有する都市によってのみフランドル＝ハンザが構成された、とピレンヌが強調したことへの反論を意識すると同時に、調停人の数と選出方法に次のような含意のあることを見出した。

フランドル＝ハンザについては、加盟都市全体のリストというものは存在しない。2つの史料に列挙される都市名は、実はハンザ加盟都市の一覧表ではなく、調停人選出母体とその数とを記したものである。そしてそこから、フランドル＝ハンザの運営で主導権を握りたいブリュッヘと、イーブルを代表とするその他一団のせめぎあいを見て取ることができる。イーブル版史料では、ブリュッヘの調停人8名という優位を認めつつも、イーブルとその他各都市の合計を18名として、ブリュッヘ単独の発言権を

8/28とし、ブリュッヘ側につく諸都市が結束しても過半数以下 (13/28) となるような内容となっている (Van Werveke, 1953b, Y3, p.312-313)。他方、ブリュッヘ側の史料では、ブリュッヘが単独で半数 (18) を有すこととし、ブリュッヘ側に立つアールデンプルクの調停人を1名増の2名、逆にリルのそれを2名から1名と減じ、エイゼンディク (Yzendijk) とシント＝アンナ＝テル＝マウデンをブリュッヘ側に入れて考えると、ブリュッヘ側の発言権が26/36で優勢になるような内容となっているのだ、と (Van Werveke, 1953a, p.66, 1953b, p.301-304)。⁽⁵⁷⁾

こうした見方が、問題の両史料を同時起草の改革案だとするヴァン＝ウェルヴェーケの想定根拠となっていることは明らかであろう。⁽⁵⁸⁾

いずれにせよ、フランドル＝ハンザの所属商人たちは、自都市での違反行為に対しては、調停人の存する都市法廷でそれを訴追し、フランドル内外での紛争については、一定の要件のもとに成立するハンザ集会においてハンザ伯・楯持・調停人がそれを処理した。そして、とりわけ海外の交易地においては、彼らハンザの幹部たちが商行為を統括し全体の円滑な進行を司ったのである。

4) 交易対象地の確定

フランドル＝ハンザの交易対象地はどこか、という点も実は確認と検討を要すべき事項である。イーブル版では、イングランドとスコットランドの国名が挙がり、その中でロンドン、ウィンチェスター (Winchester)、セント＝アイヴズの都市名が記されている (史料【13】)。他方

(54) 週市特権の有無を根拠に、フランドル＝ハンザ成立時期を12世紀末とピレンヌが推定していた前述の議論を想起せよ。

(55) 前注52参照。

(56) こうした事実から、フランドル＝ハンザの商人には明文化された資格証明書の如きものは存在しなかったことが分かる (Van Werveke, 1953a, p.67-68)。

(57) 史料【12】および表【2】参照。

(58) ペロワもこの見解を支持する姿勢を見せている (Perroy, 1974, p.6)。

ブリュッヘ版では、イングランドだけが記されそれ以外の細かな地名は記されていない (Van Werveke, 1953a, p.64, n.5.)。ロンドンのハンザという名称からも、恐らく初発はロンドンのみを対象地としていた可能性が高い。そして、やがてブリテン島で活動地域を拡大していったと考えるのは自然ではある (Van Werveke, 1953a, p.64-65)。⁽⁵⁹⁾

ところがここで、XVII都市ハンザとフランドル=ハンザとの混同を生じさせる原因の1つになった、史料文言での疑義があることを記しておかねばならない。まずヴァンデル=リンデンが、初期の史料編纂者ヴァルンケーニヒによるイーブル版第2項での記述 «*ultra mensem*» を «*ultra meusam*» と訂正し、《上に挙げた手工業や小売商を営む者たちがムーズ (マース) 河を越えて «*ultra meusam*»、あるいはイングランドへ赴き…》と読むべきところだ、と指摘していた (Vander Linden, 1896, p.28, n.2)。ところが彼はそれをもって、フランドル=ハンザがマース河南東方向に位置するシャンパーニュ大市へ向かい、XVII都市ハンザと呼ばれるようになった、という誤った結論へ辿りついてしまったのだ (Vander Linden, 1896, p.28-29)。両ハンザの混同を指摘したピレンヌも、同じ解釈によって、フランドル=ハンザの商人たちが活動の初め頃にはマース河以東へ赴いていた、と考えた (Pirenne, 1899, p.92-93)。イーブル版史料がフランドル=ハンザ成立前後に作成され、当初その交易対象地がライン地方にあり、やがて

重心をイングランドへ移す、という想定をもつピレンヌにとっては必然的な見解であったろう。⁽⁶⁰⁾

しかしながら、とヴァン=ウェルヴェーケは言う。ハンザ料徴収記録などが残っているゆえ、フランドルやブラバントの個別都市ハンザがライン地方へ赴いた可能性は認めるとしても、あのフランドル=ハンザがマース河以東や以南の地で活動したという根拠は全く見出すことはできない、と (Van Werveke, 1953b, p.292-293)。その上で、彼はブリュッヘ版第5項での対応語 «*overmarke*» に注目する。これは、《外地、自領土外》を意味する中世オランダ語で、問題としている史料がいずれも原本からの転写版であることを考えると、オランダ語をよく理解しない同時代の筆写人が、ラテン語へ転写する際に誤記が生じたと想定でき、ここは «*ultra marcam*» つまり《国境を越えて》と修正すべきである (Van Werveke, 1953b, p.292-294)、と結論づけたのであった (史料【14】)。

5) ハンザ料とハンザ資格

遠隔地交易を行う商人組織はしばしば課徴金を収受した。課徴金自体や徴収する行為をそもそもハンザといい、そうした行為主体をハンザと称するようになったのだということをここでは再確認しておこう (Pirenne, 1899, p.79, Wyffels, 1990, p.184)。⁽⁶¹⁾ 19世紀末から20世紀半ば頃に至るまで、研究者の間でフランドル=ハンザへの加入者に科されたハンザ料についてさほど大きな注目を浴びることはなく (Wyffels, 1991, p.5)、主たる議論となったのはハンザ料の徴収主体とその目的であった。

(59) ほぼ13世紀全体を通じてイングランド羊毛の輸出の大半がフランドル向けであり、それをフランドル商人が独占的に担ったことが、E. パウア (Power, E.) 以来の定説 (パウア, 1966, p.62-64) である (Perroy, 1974, p.3)。なお、イーブル商人による羊毛輸入については、Mus (1974b) を見よ。

(60) ペロワの指摘を見よ (Perroy, 1974, p.5)。

まず、サン＝トメールなどに見られるハンザ料とは、⁽⁶²⁾ 流通税などと同列のフランドル伯による安全護送税 (conductus) だと E. マイヤーはみなした (Mayer, 1894, p.461-463)。その支払によって商人たちは伯の家人層 (familia) に組み入れられたのだ、という主張である。これに対しまずヴァンデル＝リンデンが、商人や都市市民以外の者の手にハンザ料が渡された証拠は見られない (Vander Linden, 1896, p.27)、と疑念を提示した。そしてそれに続きピレンヌが、マイヤーの領主制的な説を痛烈に批判しつつ次の如く述べるに至った。即ちハンザ料とは、ハンザ成長の初期には自都市外からやってくる外来商人へ、やがて、特に自都市の手工業者を意識して課すようになったハンザ組織への加入料であり、それを安全護送と結びつけて考えることなどはできないのだ、と (Pirenne, 1899, p.70-79)。そしてピレンヌは、外国商業を行う際には商人たちが武装して隊商を組む必要があり、その費用を賄うべく、ハンザの加入者へハンザ料を要求したのだ、と考えたのである (Pirenne, 1899, p.80-84)。ヴァン＝ウェルヴェーケも、ハンザ料の性格についてはピレンヌの主張をほぼ踏襲し、ハンザ料の徴収目的が隊商の武装費用にあり、また史料【8】に見られる如く、たハンザ料

の額が加入者によってかなりの相違を見せるという事実があるが、⁽⁶³⁾ それも、商人同士あるいは手工業者を対象とした競争排除や世襲による寡占が目的だったのだという、多分に伝統的な見方を展開したのであった (Van Werveke, 1953a, p.83-84, 1958, p.96)。

50年代までの以上のような研究状況を省察しつつ、60年代以降ウェイフェルスがハンザ料の持つ意義について検討を重ね、先行研究とは異なる結論を導き出した。その端緒となったのは、ブリュッヘの都市会計簿⁽⁶⁴⁾におけるハンザ料収入記載 (1284-5年次開始) への注目であった。⁽⁶⁵⁾ ウェイフェルスは、当該史料に対する従来の研究者の無関心を批判し (Wyffels, 1960, p.5-6)、上記会計簿やその他の史料にハンザ料収入が登場し始める1280年代から1301年までの時期を対象に詳細な検討を施すことによって、次のような議論を展開したのである。

ウェイフェルスはまず、1282年から1301年にかけて、ブリュッヘ会計簿に記入されたハンザ料支払者を拾い上げる。その結果、フランドル＝ハンザへの新規加入者は総計199名で、のうち72人が世襲の加入者、119人が非世襲の加入者であることが明らかとなった (Wyffels, 1960, p.7-8)。⁽⁶⁶⁾ 更に、1281年から1299年の新規加入者について、市民権購入記録など他史料を補完的に用いることにより、氏名・加入年・支払額・職種・資産額 (1292年あるいは1297年のそ

(61) そのような意味でのハンザという語は1127年が初の言及であり (前注17参照)、その後フランドル伯フィリップ＝ダルザス (Philippe d'Alsace) による1168年のニューポルト (Nieuwpoort) への言及、1180年ダムムと1185年ビールフリート (Biervliet) へのそれが見られるという (Pirenne, 1899, p.68-69)。

(62) 加入資格を得るためのハンザ料については、サン＝トメールのハンザとフランドル＝ハンザとは一定の類似性を示す (Van Werveke, 1953a, p.70)。ただし、前者は後者よりかなりの高額であり、また後述する通り、13世紀末近くのフランドル＝ハンザと同様、14世紀前半にはサン＝トメールのハンザ料は都市会計簿へ記載され、都市財政へ組み込まれるようになる (Wyffels, 1990, p.185, 1991, p.10-11, 高橋陽子, 1992, p.272-273)。

(63) 父親がハンザメンバーの場合 5s. 3 d. を、そうでない場合は、30 s. 3 d. を支払うことが明記されている (Pirenne, 1899, p.93, Van Werveke, 1953b, p.300-301)。表【5】参照。

(64) これはウェイフェルス自身が主導して刊行されてきている史料集 (Wyffels, 1965) である。

(65) 同じくこの史料に着目したあのペロワ論文に先立つこと十数年である。ただし奇妙なことに、ペロワはこのウェイフェルス論文に一切言及していない。

れ)を取りまとめ、氏名のアルファベット順にこれらを整理して示したのであった(Wyffels, 1960, p.21-30)。(67)

そうした作業から得られた結論は、第1に、女性が合計21名と数えられること、第2に、外来者を含め基本的にブリュッヘ市民権を得た者がハンザへ加入していること、第3に、イーブル版・ブリュッヘ版の2史料に記された額通りに記されている場合が大半であること、(68) 第4に、しかし13世紀末になるとかなり高額なハンザ料を支払っている事例が7名検出され(Wyffels, 1960, p.9, 1991, p.9-12)、(69) それは資産額が相対的に少ない毛織物関連の手工業者だったと推定されること(Wyffels, 1960, p.10)(表【6】)、そして最後に、そのことは、ドラピエと呼ばれる上層手工業者のハンザ商人への社会的上昇を強く示唆すること、というものであった(Wyffels, 1960, p.9-15)。(70)

次いで91年論文においては、史料に記された金額をパリ貨換算し、ハンザメンバーの子供、ハンザメンバーでない商人、手工業者の3者について整理した上で(Wyffels, 1991, p.9)、90年論文とも合わせ改めてフランドル＝ハンザを概

観している。そこから読み取るべき主な論旨は次の3点である。まず第1が、前述した通り、新規会員の中に女性がある程度の比率をもって見て取れることである。ブリュッヘの会計簿に記載された初年度の新規加入者16名中6名が女性である(史料【6】)。そして、18年間を通じて見ると年平均10%を女性が占めている、とウェイフェルスは言う(Wyffels, 1991, p.9, n.20)。女性の存在は、ハンザ会員の娘や寡婦による営業継受ということも暗示するが、いずれにせよ、サン＝トメールについても看取できる通り、(71) このことは、商業の直接従事者が本人でなく、代理人でも可能だったことを強く窺わせるだけに重要な事実だと言えよう。(72)

上記論点と関連して第2に提起されるのが、フランドル＝ハンザの排他的性格という見方への疑問である。ピレンヌに始まる古典的な見解では、フランドル＝ハンザの構成員はそもそも商人ギルドを母体とする大商人層に限定されて

(66) 前述した通り、ブリュッヘ会計簿の中でハンザ料収入が独立した費目として最初に記載されるのが1284-5年次で、それ以前については散発的である(Wyffels, 1960, p.7)。

(67) 史料【6】で初年度の一覧を示す。

(68) 前注63参照。

(69) 手工業者がフランドル＝ハンザの資格を得るには、1年間その職を放棄した上で、金1マルクか銀10マルクのハンザ料を支払い、かつ旧職を完全に放棄することが求められた(Wyffels, 1990, p.184-185)(史料【15】)。逆に、フランドル＝ハンザの商人が手工業や小売業を営むとその資格が剥奪される、という文言も見られる(Van Werveke, 1953b, B7, p.318)。なお、サン＝トメールやミデルブルクでも、手工業者と小売商がハンザに加入することは原則禁止とされており、メヘレンでは手工業者に通常の2倍のハンザ加入料が課されている、という(Van Werveke, 1953a, p.81)。

(70) 13世紀末から14世紀初頭のイーブル毛織物工業においても、イーブル市民以外で対英通商を行う者にはハンザ資格購入が義務づけられているのを見ることができる(史料【16】)。

(71) 「ハンザ組合員の息子が、まだ非組合員であっても、父親の取引のために代理人としてイングランドやフランスに赴き、商業活動を行うことができたという。」(高橋陽子, 1992, p.58)。

(72) 女性が1人で海を渡る商業活動を行ったとは考え難いからである。しかもそうであるならば、ブリュッヘ版史料で言及されるハンザ料の支払い条項(史料【17】)の意義を次のように捉えることも可能となる。つまり、13世紀以降都市経済の規模が拡大するとともに、代理人による商取引量が増大したため、ハンザ料徴収(＝ハンザ資格授与)の実務を、中心都市たるブリュッヘにおいても可能となるように制度変更——即ち、従来イングランドとスコットランドでのみ徴収し支出していたハンザ料の運用を変更し、現地で1/3か1/2を支出し残額をブリュッヘ会計へ納入する(史料【5】)、というもの——を行おうとしたのではないか、ということである。これは、あの2史料の属性についてヴァン＝ウェルヴェーケが主張したように(Van Werveke, 1953b p.305-307)、ハンザの改革草案だとする方向での理解とも連なる視点であろう。

おり、それ以外の加入者には高額なハンザ料を要求することで参入障壁を設け、組織として排外主義・寡占主義を貫いたとされてきた (Pirenne, 1899, p.81-82, p.92-93, Van Werveke, 1958, p.94-96)。しかしながらウェイフェルスによれば、フランドル=ハンザ発展期にそうした見解が妥当するとは考え難い。13世紀前半という成長期初期については、ある程度排外主義があり得るとしても、その後都市が成長拡大し、フランドル=ハンザも成熟した経営を進めていこうとする時期に、ハンザ料という参入障壁を設けることが当該都市の対外交易全体に有効に作用したかどうか、疑問が残るからである (Wyffels, 1991, p.15)。⁽⁷³⁾ 従って、13世紀末近くに相当数の手工業者がハンザ資格を獲得している事実からすれば、当時有力貿易商と手工業者との社会的格差は従来の想定よりかなり小さくなっていったと考えるべきなのである (Wyffels, 1991, p.12-13)。⁽⁷⁴⁾ そしてそこから更に敷衍して次のような結論を呈示する。ブリュッヘ会計簿に記されたハンザ料収入は、ヴァン=ウェルヴェーケが考えたようにハンザ商人たちが支出したと考えるべきではない。ハンザ料が1284-5年次の都市会計簿へ記載されたという事実は、それが都市の公的収入と見なされるようになったことを示しており (Wyffels, 1960, p.10)、そのことは同時に、フランドル=ハンザがそれまでの私的商業組織という性格から、市参事会によ

る掌握の下、都市の公的団体としての性格を備えるようになった変容を物語るのであるから、と (Wyffels, 1991, p.6-7)。⁽⁷⁵⁾

第3は、ハンザ料の徴収目的をどのように捉えるかという点である。参入障壁とする理解への疑義は上述した通りであるが、他方で、隊商としてのハンザの武装費用とする見解も根強いものがあつた (Pirenne, 1899, p.80-81, Van Werveke, 1953a, p.83)。⁽⁷⁶⁾ ウェイフェルスはこれにも次のような疑問を呈す。ハンザ料支払いが新規加入時のみであったことを考えると、ハンザ料を武装費用とみなすことには疑問符が付く。武装費用は、その多寡は別として経常的に必要とされるものだからである (Wyffels, 1991, p.14)。そう前提した上でウェイフェルスは、13世紀に入って諸都市がしきりに獲得するようになる差押免除特権に着目する。それは、1232年のイーブルを最初として、ヘント (1259年)・ブリュッヘ (1260年)・ドウエ (1261年)・サン=トメール (1265年) が、他者の債務不履行に起因する身体や資産の拘束・没収を免れるために、イングランド国王ヘンリ3世から得た特権である。⁽⁷⁷⁾

(73) むろんウェイフェルスも、高額なハンザ料が一定の参入障壁となり得たことは認めている (Wyffels, 1991, p.11)。

(74) ウェイフェルスは、そうした身分差の縮小は13世紀中わずか1～2世代で進行したと見ている (Wyffels, 1990, p.185)。またサン=トメールのハンザについても同様な状況を見て取ることができる、という (Wyffels, 1962a, p.16-17)。この点については、高橋陽子 (1992) p.59-60も参照されたい。

(75) ウェイフェルスのこうした立論は、13世紀末以降南ネーデルラントにおける手工業者 (ドラビエを核とする) の社会・経済的上昇という基本主張 (Wyffels, 1951) と密接に重なり合っている (Wyffels, 1960, p.20-21)。特にここでは、ハンザだけでなく革紐工・靴下工アンバハトなどその他の同職組織の加入料が、ブリュッヘの都市会計へ組み入れられた事実の指摘にも留意すべきであろう (Wyffels, 1991, p.7. n.16)。なおこれと関連して、中世後期イーブルにおけるドラビエの社会・経済的台頭および、中世後期ブリュッセルにおける同職組織財政の自立性喪失と都市財政への編入、という議論を拙著においても行ったことを記しておきたい (藤井, 1998, 2007a)。

(76) ただしピレンヌは、よそ者商人への隊商加入費用としてのハンザ料はごく初期のものであり、中世盛期以降のそれは、主として手工業者排除を目的として課されるようになったものだと考えている (Pirenne, 1899, p.81-82)。

ウェイフェルスの見立てによると、フランドル＝ハンザを梃子とした外国貿易の成長は他方で、無資産かつ山師的な同胞商人が外国市場へ参加する可能性を拡大させた。そして同時に、彼らが取引地で犯した債務不履行や不法行為のため、同胞と見なされたハンザ商人が、現地で身体の拘束や財産の差押という被害を受ける危険性も増大させたのである。従って、ハンザ料徴取とは実は手工業者に対する加入制限ではなく、むしろ十分な経営基盤を持たない同胞が、外国市場へ何の制約もなしに参入して来るのを防ぐためのものであり、全体として交易円滑化を実現する目的を持っていたのだ、と主張するのである (Wyffels, 1990, p.185, 1991, p.16-17)。ウェイフェルスは直接触れてはいないものの、本稿冒頭で言及した、商取引における債務履行の問題という議論と重なるだけに、これは重要な視点と言わざるを得ない。

おわりに—仮説と展望—

これまでの検討をもとに、ロンドンのフランドル＝ハンザの大まかな経済史像を再構成し、その上で若干の仮説と展望を示すことで本論文を締めくくりたい。

13世紀末頃だと想定するペロワのやや極端な主張を別にすれば、⁽⁷⁸⁾ フランドル＝ハンザは、それ以前に存在した南ネーデルラントの諸都市ハンザや多数の商人ギルドを糾合し、13世紀前半ブリュッヘを中核に据えて成立した。全体統括者としてのハンザ伯、武装シンボルたる楯持

を主要幹部として、各都市から代表調停人を選出し、裁判を兼ねた一種の総会を持つことで全体の運営を図った。彼らは、ドーバー海峡を越えて、イングランド羊毛の輸入と大陸側の物産輸出を担ったのである。当初からハンザ料を徴取していたかどうか定かではない。しかし、13世紀半ば以降 (1270年代の通商危機を含め) 何らかの混乱が内外に生じたため、従来の運営方法を見直す必要が生じたと想像される。その際に提起された2つの改革案が、現在伝来する2史料の内容としてイーブルとブリュッヘによって提言された可能性は、ヴァン＝ウエルヴェーケが言う通り確かに高い。ここにハンザ料の額や徴取方式が明確に記されているからである。ヴァン＝ウエルヴェーケ説とペロワ説とを合わせて援用するなら、70年代通商危機に際してイーブルとブリュッヘとの間でフランドル＝ハンザの主導権争いが演じられた、と考えられる。実際両史料は、各都市が選出する調停人の数という点で大きな食い違いを見せるのである。また、ハンザ料収入がブリュッヘ都市会計で処理されるという事態へも導いたのであった。

1280年代からブリュッヘ会計簿に新規参入者とその支払額が記されるようになり、それは14世紀初頭まで続く。そこに、高額加入料を必要とするものの手工業者の会員が、そして女性の会員が一定程度見られることは銘記すべきであろう。14世紀に入り、フランス王国軍の介入を招く1302年の有名な内乱 (金拍車の戦い) 以後、

(77) これらにはペロワも注目していた (Perroy, 1974, p.7)。なお、1155-58年サン＝トメール商人に対して最初に与えられたイングランド王ヘンリ2世の商業特権には、まだこうした差押や没収の免除特権は含まれていない、という (Wyffels, 1991, p.16)。

(78) 13世紀半ばまでに、フランドル内外で個別都市ハンザの形成と商人の貿易活動が随所に見られること、また間接的ではあれ史料での言及が存在することを勘案すれば、ペロワが力説するようにフランドル＝ハンザの成立を13世紀後半以降と想定するにはやはり無理であろう。

フランドル諸都市の能動的商業つまりフランドル＝ハンザはその活動を終えるのである。

最後の点は次のように敷衍しなくてはなるまい。13世紀末フランドル諸都市の旧来型国際商人は各都市内で影響力を低下させ、ドラピエに代表される新興中産層の台頭を見る状況になっていた(藤井, 1998)。1302年以降は更にそれが決定的となり、フランドル商業はその能動性をほぼ完全に失った。高橋(小西)は、H.ラインケの仕事(Reincke, 1943)に依りつつ、13世紀後半以降フランドル商人のドイツ方面への自己商業 *Eigenhandel*、更にはフランドル人自身による代理商業が、次第にドイツ人に取って代わられたことを強調する(高橋陽子, 1982, p.89-91)。(79)

14世紀初頭には、都市内での政治・経済的地位を向上させた手工業者が、かつての大商人の地位に肉薄することは法的・政治的に可能となっていた。(80) こうした推移の中で、上記高橋論文も若干触れているように、外来商人をエージェントとすることでフランドルの在地商人ないし上層手工業者がプリンシパルとしての地位を獲得し、リスクとコストの削減を実現したのだと考えることも可能なのではないか。つまり、南ネーデルラント商業の旧来型コスト－収益構造の変化、別言すれば、自己型商業組織を

通じたコーディネーションによるコスト低減が13世紀末には限界となり、大型の反乱を契機とする都市内の社会・経済構造の変容を通じて、受動型商業にコスト削減機能を求めたのだと理解できる、ということである。(81)

中世後期南ネーデルラントにおける商業の受動化、金融業の成長、ドイツ＝ハンザの伸長という論点は既に定説となっていると言って良いが、(82) 他方で、フランドル伯領やブラバント公領における少数都市への交易集中と取引費用の減少、エージェントの機能・意義という比較的最近の論点がそこに組み込まれてもいることを銘記したい(Stabel, 2007, p.36-37)。

従って、「フランドル商人の中には、フランドルを訪問するドイツ商人とフランドル織物工業の仲介により利益を得る者が登場してくる」(高橋陽子, 1982, p.91) こと、更に「そうした状況が世界市場としてのブリュッヘを生み出してくるのだ」(Van Werweke, 1936, p.21) とすれば、(83) そうした変化をフランドル都市内部における外来商人へのエージェントシステムの形成、と捉えることも可能であろう。

西欧中世における都市の在地商人(および手工業者)と外来商人との取引関係に関する史的理論は構築途上であり、また実証研究も、こうした領域に関しては定量的・定性的になお十全

(79) ただし、その原因をラインケの言う「企業家精神の変化」に求めるのは性急であろうとし、ヴァン＝ウェルヴェーケ(Van Werweke, 1936, p.24)と同様、外国人への国際商取引の譲歩原因には、様々な要因の重なりがあったことを主張している(高橋陽子, 1982, p.74)。なお、15世紀以降の南ネーデルラント毛織物のドイツ＝ハンザ商人による輸出という点については、Peeters(1985) p.133-134を参照されたい。

(80) もちろん、かつて主張された「手工業者による市政掌握と民主化」という単純な図式は、今やそのままでは支持されないが。この点については、藤井(1998) p.207-214, (2007b)を見よ。

(81) 14世紀初頭以降、フランドル諸都市から在地商人が完全に姿を消したとまで言うことはできないものの、従来型の都市貴族＝大商人の部分的存続であれ、内乱後台頭した新興上層手工業者たちであれ、もはや商人ギルドやハンザを通じて原料輸入や製品輸出を行うことは、毛織物工業全体のコスト上昇を招く結果に導いたのではないか、ということなのである。

(82) こうした論点に関しては差し当たり、アールツ(2005) p.19-77参照。

(83) 中世における国際市場あるいは資本主義揺籃の地としてのブリュッヘ、という位置づけについてはJ.A. ヴァン＝ハウテ(Van Houtte, 1982) およびJ.M. マレー(Murray, 2004)の仕事を見よ。

とは言い難い状況にある。⁽⁸⁴⁾ 本論冒頭で言及した交易システムに関する理論的検討に対して、歴史分析の実証的アプローチによる貢献の可能性は大きく、今後深耕の余地が十分あると考える所以である。

* 本論文は以下の研究費による研究成果の一部

である。【研究種目名】独立行政法人日本学術振興会 科学研究費補助金・基盤研究（B）（課題番号：22320146）、【期間】平成22年度～平成24年度、【研究課題名】「ヴァロワ朝ブルゴーニュ国家の社会・経済・文化に関する統合的研究」

史料

（下線はすべて引用者藤井による）

史料【1】ヘント商人ギルドへ周辺都市商人の編入を許可するフランドル伯ボードワン9世の特許状（1199年）〔抜粋〕

«Illi de Gandavo neminem debent trahere ad hansam suam quam illos qui manent infra quatuor portas de Gandavo et eos qui pertinent ad castrum comitis.» (Warnkönig, 1836a, p.248)

史料【2】フランドル＝ハンザの史料（イーブル版）〔冒頭〕

Projet de statuts de la Hanse flamande de Londres présenté par les marchands yprois faisant partie de cette association.

「この共同組織に加盟するイーブル商人が提出したロンドンのフランドル＝ハンザに関する規約草案」
«D'Ippe. Notum sit omnibus presentibus et futuris quod secundum quod ratio videtur illis de Yppra hansa Flandrensiū, Brugensiū scilicet et illorum qui ad hansam illam pertinent, stare debet hoc modo.»（以下全6条項）
(Van Werveke, 1953b, Y, p.310-315)

* 斜字体は編者による冒頭説明文

史料【3】フランドル＝ハンザの史料（ブリュッヘ版）〔冒頭〕

Projet de statuts de la Hanse flamande de Londres présenté par les échevins de Bruges.

「ブリュッヘ市参事会が提出したロンドンのフランドル＝ハンザに関する規約草案」

«C'est li ordenance de tenir la hanse c'on apiele hanse de Londres, et entre ceus de Bruges.»（以下全12条項）
(Van Werveke, 1953b, B, p.315-320)

* 斜字体は編者による冒頭説明文

史料【4】ブリュッヘ市参事会員の選任規定におけるロンドン＝ハンザへの言及（1241年1月）

«Insuper manuoperius quicumque fuerit, nisi per annum et diem a manuopere suo se abstinuerit, et

(84) 西欧中世における外来商人やよそ者に関する研究としてひとまず、藤井（1995）、パイヤー（1997）を挙げる。

Hansam Londoniensem sit adeptus, a nobis in scabinum eligi non debet.»

(Gilliodts-Van Severen, 1874, p.196)

史料【5】ハンザ料収入の取扱い条項

«Dou pourfit ki venra de la hanse c'on gaaigne en Engletiere nous samble bon, se il vous samble ausi bon, c'on despendie là la moitié ou la tierce partie, et c'on aporte le remanant en la huge pour efforcier le commun droit de la hanse.»

(Van Werveke, 1953b, B11, p.319-320)

史料【6】1284-85年次のブリュッヘ会計簿におけるハンザ料収入（収入の部第8項）（計16名）

« De Hansa.

In die Valentini [14 febr.1285] a Johanne, filio Lamberti de zekenghem, 5 s. sterl.

Item tunc a Laurino, filio Theodderici ex Broeke, 5 s. sterl.

Item tunc a Maria Rike 30 s. sterl.

Item tunc a Waltero de Scathille 30s. sterl.

Item tunc a Godeleva de Hersberghe, beghina, 30 s. sterl.

Item tunc a Michaele de Sancto Amando 30 s. sterl.

Item tunc in die Marci ewangeliste [25 april] a Katerina, filia Sygeri Woelbru, 30 s. sterl.

Item tunc a Waltero, filio Willelmi Scinkels, 5 s. sterl.

Item tunc in medio mensis maii a Willelmo Cletin 30 s. sterl.

Item tunc a Johanne de Capella, clerico, 30 s. sterl.

Item tunc a Katerina, filia Reineri de Zande, 30 s. sterl.

Item tunc a Margareta, filia Johannnis de Ypra, uxore Laurini Vinne, 30 s. sterl.

Item tunc a Symone Vos, de Oudenarde, 30 s. sterl.

Item in die Egidii [1 sept. 1284] a Willemo de Hille, de Zedelgheem, 30 s. sterl.

Item tunc ab Adelisa, filia Zoetkini Nonemeests, 30 s. sterl.

Item tunc a Petro Scakel 30 s. sterl.

Summa huius 67 1/2 lib. »

(Wyffels, 1965, p.102-103)

*下線は女性と思われる者

史料【7】1277年イングランド王エドワード1世による安全護送宣言

«Nov.28. Montgomery. Protection and safe-conduct for the brugesses and merchants of Ypres, Douay, Dikemue and Popering, and to their ministers in coming into the realm with their goods and merchandise to trade, staying there, and returning thence; ... »

(Calendar, 1893, p.248)

史料【8】ハンザ料と役職者に関する記述

«Nus ne puet avoir la hanse francement, se ses peres ne l'a eue; et se ce fust cose ke ses peres l'eust eue, et il le volsist waaignier, il devroit donne V s. et III d. d'esterlins. De ces deniers devront avoir li communs de la hanse V s., li escildrake 2 d., li clers I s., et tout cil, li quel pere n'eussent mie eut la hanse, ne sont mie franc, si doivent waegnier la hanse XXX s. et III d. d'esterlings.»

(Van Werveke, 1953b, B4, p.317)

史料【9】ブリュッヘ人のハンザ伯が不在の場合ハンザ集会の開催を不可とする記述

«Au premier doit on savoir c'on doit par droit ceste hanse waegner en Engletiere ou à Bruges, et c'on ne puet en nul liu sir à la hanse, s'il n'i a home de Bruges ki soit quens de la hanse et ki n'ait la hanse de Londres gaaigné.»

(Van Werveke, 1953b, B1, p.316)

史料【10】イーブル商人不在の際の代理楯持選任に関する記述（イーブル版）

«... si nullus de Yppra ibi esset, illi de dixmud debent esse scildraca..., Et si illi de Dixmud non essent in pleno jure hanse, debent esse scildraca illi de Erdenborgh..., Et si illi de Erdenborgh non fuerint presentes, debent esse scildraca illi de Insula...»

(Van Werveke, 1953b, Y3, p.313)

史料【11】イーブル商人不在の際の代理楯持選任に関する記述（ブリュッヘ版）

«Li scildrake doit estre d'Ippre, et se il n'i avoit nul d'Ippre où on hansoit, on devoit prendre I scildrake de Dikemue; s'il n'en i avoit nul de Dikemue, si en prendroit on un de Rodenborc; se il ne i avoit nul de Rodenbord, si prendroit un d'Audenborc...»

(Van Werveke, 1953b, B2, p.316)

史料【12】フランドル＝ハンザの調停人の数に関する記述

«En tous lius où on siet droite hanse, doivent cil d'Ippre III arbitres, cil de Tornai I, cil de Lille I, cil d'Orcies I, cil de Furnes I, cil de Dikemue II, cil de Rodenborc III, cil d'Audenborc II, cil d'Osteborc I, cil d'Isendike I, cil de Mue I, cil de Bruges autant comme tout li autre, et se ce fust cose ke tout cil n'i fussent mie, on ne devoit pour cou mie laisser le hanser, par ensi qu'il i eust I de Bruges et I escildrake et arbitres de II villes.»

(Van Werveke, 1953b, B3, p.316)

史料【13】フランドル＝ハンザのイングランドでの交易地名

«Sciendum eciam quod nemo hansam suam lucarri potest nisi apud Londonium vel apud Winchester vel apus Scantum Yvonem vel in portu Anglie vel in portu Scochie ubi potest lucarri.»

(Van Werveke, 1953b, Y5, p.313)

史料【14】フランドル＝ハンザの交易地に関する史料中の言及

«Si hujusmodi homines inventi fuerint ultra mensem vel in Anglia, vel alibi ubi libertas ista tenetur,...»

(Warnkönig, 1836b, §2, p.506)

«On doit savoir ke ciaus ke ciaus sunt overmarke, c'est a dire ki sunt de tel mestier come il i a chi desous escrit,...»

(Van Werveke, 1953b, B5, p.317)

史料【15】手工業者がフランドル＝ハンザに加盟する条件について

«Nus de ciaus ne puet avoir sa hanse, se il n'a gaaignié sa conflarie en la vile où il est manant I marc d'or ou X mars c'estrelains sans riens laissier, et si doit cesser I an de son mestier devant ke il puisse venir à la hanse, et si doit fourjurer à tous jours son mestier, ... puet il gaaigner sa hanse de XXX s. et III d. d'estrelins, et ...»

(Van Werveke, 1953b, B5, p.317)

史料【16】イーブル毛織物工業規約に見るフランドル＝ハンザ加入義務条項（13世紀末－14世紀初頭）

«Nus bourgeois onghebuerech voise en Engletierre, ne i envoicche son avoir pour marchaneir, sour 50 lb., se il n'a achaté se hanse.»

(Espinass, 1924, t.3, p.501, no.765, §1)

史料【17】ロンドンでの手続きに準ずるブリュッヘでのハンザ料徴収方法について

«Tout cil ki voelent hanse en Flandres waegnier, le puent gaaignier à Bruges tout en tel maniere com il le gaaigneroient en Engletiere, par ensi ke il doivent porter lettres de leurs viles, coument il le puent gaaignier, dont avront il congiet d'aler querre I scildrake d'Ippre.»

(Van Werveke, 1953b, B9, p.319)

表【1】 14世紀初頭以前の南ネーデルラントにおける都市ハンザ

(Van Werveke (1953a), Perroy (1974) より作成)

成立時期	都市名	活動地域
11世紀末?	ヴァランシエンヌ (a)	不明
12世紀前半?	サン＝トメール (b)	イングランド・スコットランド・アイルランド・ソムム河 (Somme) 以南
12世紀末	ヘント (c)	ラインラント
13世紀前半	XVII 都市ハンザ	シャンパーニュ大市
13世紀前半?	フランドル＝ハンザ	イングランド・スコットランド
13世紀後半	ミデルブルク (d)	マース河 (Maas) 以東・ズウィン (Zwin) 河以南 (フランドルを除く)
13世紀後半	メヘレン (e)	マース河以東・スヘルデ河 (Schelde) 以西
14世紀初頭	アントウェルペン (f)	マース河以東

* カッコの記号は後掲地図中の地名

表【2】 フランドル=ハンザの都市名と各都市代表の調停人の数

(Van Werveke, 1953b, p.302より作成)

ラテン語(イーブル)版 都市名 (Y3)	人数	仏語(ブリュッヘ)版 都市名 (B3)	人数
ブリュッヘ (1)*	8	ブリュッヘ	18**
イーブル (2)	4	イーブル	4
ディクスマッデ (3)	2	ディクスマッデ	2
アールデンブルク (4)	2	アールデンブルク	3
リル (5)	2	リル	1
オウデンブルク (6)	1	オウデンブルク	2
オーストブルク (7)	1	オーストブルク	1
フルヌ (8)	1	フルヌ	1
トゥールネ (9)	1	トゥールネ	1
オルシー (10)	1	オルシー	1
ダンム (11)	1	エイゼンディク (16)	1
トルハウト (12)	1	シント=アンナ=テル= マッデン (17)	1
ベルグ (13)	1		
バイユール (14)	1		
ポーペリングゲ (15)	1		
計15集落	計28人	計12集落	計36人

* カッコの数字は後掲地図中の地名

** 史料中では《他都市の合計と同じ数》と叙述 (史料【12】)

表【3】 XVII 都市ハンザを構成した都市と所属領

(Laurent (1935b) p.88より作成)

13世紀中葉	備考	14世紀初頭	備考
Arras	Flandre 伯領 10集落	Arras	Flandre 伯領 12集落
Saint-Omer		Saint-Omer	
Tournai		Tournai	
Gand		Gand	
Bruges		Bruges	
Ypres		Ypres	
Dixmude		Dixmude	
Lille		Lille	
Douai		Douai	
Bailleul		Bailleul	
		<i>Poperinghe</i>	
	<i>Orchies</i>		
Abbeville	Ponthieu 伯領	Abbeville	Ponthieu 伯領
Montreuil-sur-Mer	2集落	Montreuil-sur-Mer	2集落
Amiens	Vermandois 領 4集落	Amiens	Vermandois 領 4集落
Saint-Queintin		Saint-Queintin	
Beauvais		Beauvais	
Perrone		Perrone	
Aubenton	Champagne 伯領 2集落	<i>Provins</i>	Champagne 伯領 2集落
Châlon-sur-Marne		Châlon-sur-Marne	
Reims		Reims	
Huy	帝国内 Liège 司教領 Hainaut 伯領 3集落	Huy	帝国内 Liège 司教領 Hainaut 伯領 3集落
Cambrai		Cambrai	
Valendiennes		Valendiennes	
計	22集落	計	24集落

* 斜字体は新規加盟都市

表【4】 フランドル=ハンザ出現時期と史料作成年代に関する諸見解

研究者名	ハンザの成立時期	イーブル版成立時期	ブリュッヘ版成立時期
ヴァルンケーニヒ他*	13世紀後半～14世紀	——	——
ケーネ*	1187年以前	1187年以前	1187年以降?
ヴァンデル=リンデン*	1241年以前(1220年頃か?)	ブリュッヘ版に先行	1241年以前
ピレンヌ	1187年以後	1187年以後	1241年頃
ヴァン=ウェルヴェーケ	1212年～1241年	両者同時期1242年**～1285年	
ペロワ	1278年～1284年	1278年以降	
ウェイフェルス	1212年～1241年	——	——

* XVII 都市ハンザと混同 ** 復活祭暦を勘案してピレンヌ説の1241年を1242年に修正

表【5】 フランドル=ハンザの新規加入料

(Wyffels, 1991, p.8-9より作成)

	ハンザ料 (パリ貨換算)	パリ貨換算総額をドニエに換算
ハンザメンバーの子供	5s. 3d. (16s. 8d.)	328d.
ハンザメンバー以外の商人	30s. 3d. (5lb. 10d.)	1210d.
手工業者	金1marc & 30s. 3d. (21lb. 14s. 2d.)	5322d. (1marc=4104d.+ハンザ料1218d.)

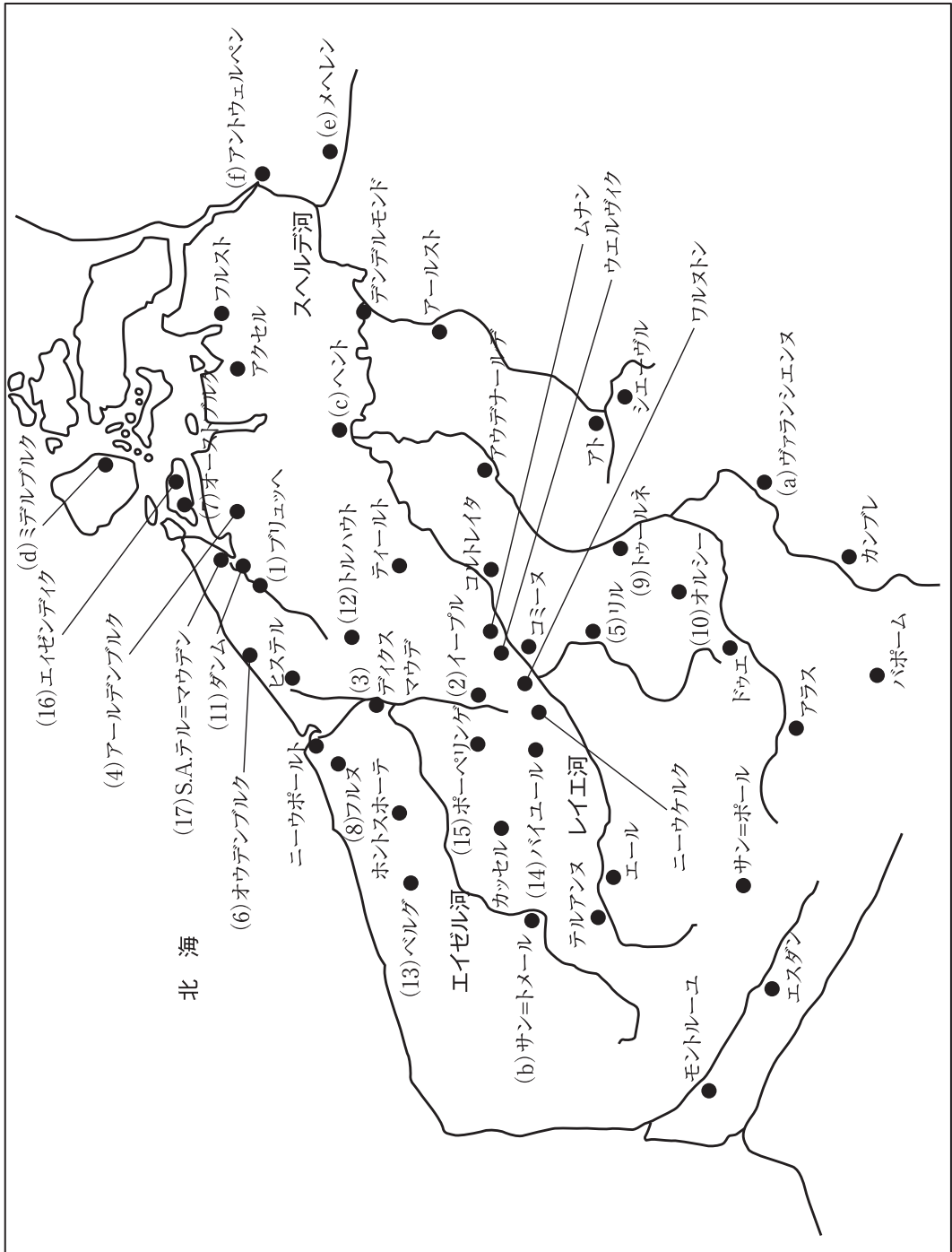
表【6】 13世紀フランドル=ハンザの高額加入料支払者

(Wyffels, 1960, p.9, p.22-27より作成)

氏名	加入年	支払額	職種	資産額
FORMATOR, Simon	1294	5lb. 16s. 8d. *par.	不明	不明
GRISE, Pieter	1298	16lb. 13s. 4d. par.	不明	不明
HEGHER, Pieter	1295	6lb. 10s. par.	ドラピエ drapier	400lb. (1297年)
PINKERE, Jan	1298	16lb. 13s. 4d. par.	不明	不明
ROMPOT, Willem	1290	6lb. 10s. **st.	不明	800lb. (1297年)
ZEVEKOTE, Niklaas van	1292	6lb. 12s. st.	毛織物切売人 lakensnijder	400lb. (1297年)
ZWALEWE, Willem van	1290	6lb. 10s. st.	ドラピエ drapier	不明

* par.=parisis **st.=sterling

地図 フランドル伯領および周辺の都市



文献一覧

欧語

- Abraham-Thisse, S. (1993) “Le commerce des draps de Flandre en Europe du Nord: Faut-il encore parler du déclin de la draperie flamande au bas moyen âge ?”, in Boone (1993a) p.167-206.
- Aubin, H. (1965) (ed.) *Beiträge zur Wirtschafts-und Stadgeschichte. Festschrift für Hektor Ammann*, (Steiner), Wiesbaden.
- Berben, H. (1937) “Une guerre économique au moyen âge: L’embargo sur l’exportation des laines anglaises (1270-1274),” in *Etudes* (1937) p.1-17.
- Berben, H. (1944) “Het verdrag van Montreuil 1274. De Engels-Vlaamse handelspolitiek 1266-1287,” in *Revue belge de philologie et d’histoire*, t.23, p.89-126.
- Blockmans, W. (1996) /Van Voss, L.H. “Urban networks and emerging states in the North Sea and Baltic Areas: A maritime culture?” in Roding (1996) p.10-20.
- Boone, M. (1993a) /Prevenier, W. (eds.) *La draperie ancienne des Pays-Bas. Débouchés et stratégies de survie, XIV^e-XVI^e siècle, (Actes du Colloque tenu à Gand, le 28 avril 1992)*, (Garant), Leuven/Apeldorn, 1993.
- Boone, M. (1993b) “L’industrie textile à Gand au bas moyen âge ou les résurrections successives d’une activité réputée moribonde,” in Boone (1993a) p.15-61.
- Bourquelot, F. (1865) *Etudes sur les foires de Champagnes sur la nature, l’étendue et les règles du commerce qui s’y faisait aux XII^e, XIII^e et XIV^e siècles*, Paris.
- Brand, H. (2005) (ed.) *Trade, diplomacy and cultural exchange: Continuity and change in the North Sea area and the Baltic c.1350-1750*, (Verloren), Hilversum.
- Brun-Lavainne (1829) “Statuts de la Hanse flamande de Londres,” in *Archives du Nord de la France*, vol.1, Valenciennes (reprod. in *Roisin. Franchises, lois et coutumes de la ville de Lille*, Lille, 1842, p.151-153).
- Calendar (1893) *Calendar of the Patent rolls, preserved in the Public Record Office: Edward I, prepared under the superintendence of the Deputy Keeper of the Records*, Vol.1: 1272-1281, London (Nendeln: Kraus Reprint, 1971).
- Carolus-Barré, L. (1965) “Les XVII Villes: Une Hanse vouée au grand commerce de la draperie,” in *Comptes-rendus de l’académie des inscriptions et belles-lettres*, (janvier-juin), p.20-30.
- Carus-Wilson, E. (1952) “The wollen industry,” in Postan (1952a) p.355-429.
- Clark, P. (1990) (ed.) *Towns and networks in Early Modern Europe*, (Centre for urban history: University of Leicester Working papers, no.4), Leicester.
- Clark, P. (1995) (ed.) *Small towns in Early Modern Europe*, (Themes in International Urban History 3), (Cambridge UP.), Cambridge.
- Coornaert, E. (1948) “Les gildes médiévales (V^e-XIV^e siècles): Définition, évolution,” in *Revue historique*,

- t.99, p.22-55, p.208-243.
- De Moor, T. (2008) “The silent revolution: A new perspective on the emergence of commons, guilds and other forms of corporate collective action in Western Europe,” in Lucassen (2008) p.179-212.
- Derville, A. (1981) (dir.) *Histoire de Saint-Omer*, (Presses universitaires de Lille), Lille.
- Dijkman, J. (2011) *Shaping medieval markets: The organisation of commodity markets in Holland, c.1200 - c.1450* (Global Economic History Series; 8), (Brill), Leiden / Boston.
- Doehaerd, R. (1946) *L'expansion économique belge au moyen âge*, Bruxelles.
- Doehaerd, R. (1951) “A propos du mot Hanse,” in *Revue du Nord*, t.53, p.18-28.
- Dollinger, Ph. (1964) *La Hanse (XII^e-XVII^e siècles)*, (Aubier collection historique), Paris, 1964.
- Dugnoille, J. (1977) Aspects d'une ville franche en ses débuts: Ath du XII^e au XIV^e siècle, in *Annales du cercle royal d'histoire et d'archéologie de la région d'Ath*, t.46, (1976-77), p.113-146.
- Edwards, J. (2012) / Ogilvie, S. “Contract enforcement, institutions, and social capital: The Maghribi traders reappraised,” in *The economic history review*, vol. 65, p.421-444.
- Epstein, S.R. (1998) “Craft guilds, apprenticeship, and technological change in Preindustrial Europe,” in *The journal of economic history*, vol.58, p.684-713.
- Epstein, S.R. (2008a) /Prak, M. (eds.) *Guilds, innovation and the European economy, 1400-1800*, (Cambridge UP), Cambridge / New York / Melbourne.
- Epstein, S.R. (2008b) /Prak, M. “Introduction: Guilds, innovation and the European economy, 1400-1800,” in Epstein (2008a) p.1-24.
- Espinas, G. (1913) *La vie urbaine de Douai au moyen âge*, 4 vols., (Picard), Paris.
- Espinas, G. (1924) / Pirenne, H. (eds.) *Recueil de documents relatifs à l'histoire de l'industrie drapière en Flandre*, 3 vols., (Palais des Académie), Bruxelles (1906-1924).
- Espinas, G. (1930) *Une guerre sociale interurbaine dans la Flandre Wallonne au XIII^e siècle, Douai et Lille, (1284-1285)*, (Raoust), Paris / Lille.
- Espinas, G. (1933) *Les origines du capitalisme*, vol.1: *Sire Jehan Boinebroke, patricien et drapier douaisien (?-1286 environ)*, (Raout), Lille.
- Etudes (1937) *Etudes d'histoire dédiées à mémoire de Henri Pirenne par ses anciens élèves*, (Nouvelle société d'éditions), Bruxelles.
- Gelderblom, C. (2004) “The decline of fairs and merchant guilds in the Low Countries, 1250-1650,” in *Jaarboek voor middeleeuwse geschiedenis*, t.7, p.199-238.
- Gelderblom, C. (2009) /Grafe, R. “The rise, persistence and decline of merchant guilds. Re-thinking the comparative study of commercial institutions in Pre-Modern Europe,” in Murphy (2009).
- Gilliodts-Van Severen, L. (1874) *Coutumes des Pays et comté de Flandre. Quartier de Bruges*, t.1: *Coutumes de la ville de Bruges*, (Gobbaerts), Bruxelles.
- Goldberg, J.L. (2012) *Trade and institutions in the medieval Mediterranean. The Geniza merchants and their*

- business world*, (Cambridge studies in economic history), (Cambridge UP), Cambridge.
- Greif, A. (1994) /Milgrom, P. /Weingast, B.R. “Coordination, commitment, and enforcement: The case of the merchant guild,” in *The journal of political economy*, t.102, p.745-776.
- Greif, A. (2006) *Institutions and the path to the modern economy: Lessons from medieval trade*, (Cambridge UP), Cambridge /New York, etc. →邦訳 *グライフ* (2009)
- Greif, A. (2012) “The Maghribi traders: A reappraisal?” in *The economic history review*, vol.65, p.445-469.
- Höhlbaum, K. (1898) “Über die Flandrische Hanse von London,” in *Hansische Geschichtsblätter*, Jg. 28, p.147-180.
- Jansen, H.P.H. (1982) “Handel en nijverheid 1000-1300,” in *Algemene Geschiedenis der Nederlanden*, t.2, Haarlem, p.148-186.
- Joosen, H. (1935) “Recueil de documents relatifs à l’histoire de l’industrie drapière à Malines des origines à 1384,” in *Bulletin de la commission royale d’histoire*, t.99, p.365-572.
- Köhne, C. (1893a) *Das Hansgrafenamt. Ein Beitrag zur Geschichte der Kaufmannsgenossenschaften und Behördenorganisation*, (R. Gaertners Verlag), Berlin.
- Köhne, C. (1893b) “Das Hansgrafenamt in Flandern,” in Köhne (1893a) p.205-245.
- Laurent, H. (1934) “Choix de documents inédits pour servir à l’histoire de l’expansion commerciale des Pays-Bas en France au moyen âge (XII^e-XV^e siècle),” in *Bulletin de la commission royale d’histoire*, t.98, p.335-416.
- Laurent, H. (1935a) *Un grand commerce d’exportation au moyen âge: La draperie des Pays-Bas en France et dans les pays méditerranéens (XII^e-XV^e siècles)*, (Gérard Monfort), Paris.
- Laurent, H. (1935b) “Nouvelles recherches sur la Hanse des XVII villes,” in *Le moyen âge*, t.6, p.81-94.
- Lesger, C. (2001) *Handel in Amsterdam ten tijde van de opstand: Kooplieden, commerciële expansie verandering in de rimpelrijke economie van de Nederlanden ca.1550-ca.1630*, (Verloren), Hilversum.
- Lesger, C. (2005) /Wijnroks, E.H. “The spatial organization of trade: Antwerp merchants and the Gateway Systems in the Baltic and the Low Countries c.1550,” in Brand (2005) p.15-35.
- Lesger, C. (2006) *The rise of the Amsterdam market and information exchange: Merchants, commercial expansion and change in the spatial economy of the Low Countries, c.1550-1630*, (Ashgate), Aldershot.
- Lis, C. (2008) /Soly, H. “Subcontracting in guild-based export trades, thirteenth-eighteenth centuries,” in Epstein (2008a) p.81-113.
- Lloyd, T.H. (1977) *The English wool trade in the middle ages*, (Cambridge UP), Cambridge.
- Lucassen, J. (2008) /De Moor, T. /Van Zanden, J.L. (eds.) *The return of the guilds: Towards a global history of the guilds in Pre-Industrial Times*, (International review of social history, supplement 16), (Cambridge UP), Cambridge.
- Mayer, E. (1894) *Zoll Kaufmannschaft und Markt zwischen Rhein und Loire bis in das XIII Jahrhundert (Festschrift für Konrad von Maurer)*, Göttingen.

- Milgrom, P.R. (1990) /North, D.C./Weingast, B.R. “The role of institutions in the revival of trade: The medieval law merchant, private judges, and the Champagne fairs,” in *Economics and politics*, vol.2, p.1-23.
- Moore, E.W. (1985) *The fairs of medieval England: An introductory study*, (Pontifical Institute of Medieval Studies), Toronto.
- Murphy, A. (2009) *Organizer: XVth World Economic History Congress (Utrecht 2009); M2 – The role of trust in the development of finance and commerce, (Monday, August 3)*. (<http://www.wech2009.org/>)
- Murray, J.M. (2004) *Bruges, cradle of capitalism, 1280-1390*, (Cambridge UP), Cambridge / New York.
- Mus, O. (1974a) /Van Houtte, J.A. (eds.) *Prisma van de geschiedenis van Ieper*, (Stadsbestuur Ieper), Ieper.
- Mus, O. (1974b) “Het aandeel van de Ieperlingen in Engelse wolexport, 1280-1330,” in Mus (1974a) p.332-355.
- Nicholas, D. (1992) *Medieval Flanders*, (Longman), London / New York.
- Nicholas, D. (2009) *The Northern Lands. Germanic Europe, c.1270-c.1500*, (Wiley-Blackwell), Malden / Oxford.
- Ogilvie, S.C. (2004) “Guilds, efficiency and social capital: Evidence from German proto-industry,” in *The economic history review*, t.57, p.286-333.
- Ogilvie, S.C. (2005) “The use and abuse of trust: The deployment of social capital by early modern guilds,” in *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte*, Nr.1, p.15-52.
- Ogilvie, S.C. (2007) “Whatever is, is right? Economic institutions in Pre-Industrial Europe,” in *The economic history review*, t.60, p.649-684.
- Ogilvie, S. (2011) *Institutions and European trade: Merchant guilds, 1000-1800*, (Cambridge UP), Cambridge.
- Pagel, K. (1965) *Die Hanse*, (Georg Westermann Verlag), Braunschweig.
- Peeters, J.-P. (1984) “Het verschijnsel der gilden en hanzen in de middeleeuwse steden in de Nederlanden,” in *Revue belge de philologie et d'histoire*, t.62, p.271-288.
- Peeters, J.-P. (1985) “Een bedrijf tussen traditie en vernieuwing: De Brusselse draperie in de 15de eeuw (1385-1497),” in *Tijdschrift voor Brusselse geschiedenis*, t.2, p.123-162.
- Pernoud, R. (1948) *Les villes marchandes aux XIV^e et XV^e siècles*, (Table ronde), Paris.
- Perroy, E. (1974) “Le commerce anglo-flamand au XIII^e siècle: La Hanse flamande de Londres,” in *Revue historique*, t.252, p.3-18.
- Peyer, H.C. (1987) *Von der Gastfreundschaft zum Gasthaus: Studien zur Gastlichkeit im Mittelalter*, (Monumenta Germaniae Historica Schriften, Bd. 31), (Hahnsche Buchhandlung), Hannover. →邦訳パイヤー (1997)
- Pirenne, H. (1898) “Villes, marchés et marchands au moyen âge,” in *Revue historique*, t.67, p.59-70. →邦訳ピレンヌ (1988b)
- Pirenne, H. (1899) “La Hanse flamande de Londres,” in *Bulletin de l'académie royale de Belgique, classe des*

- lettres*, 3^e série, t.37, p.65-108.
- Pirenne, H. (1905) “Les villes flamandes avant le XII^e siècle,” in *Annales de l’Est et du Nord*, t.1, p.9-32. → 邦訳ピレンヌ (1988c)
- Pirenne, H. (1927) *Les villes du moyen âge. Essai d’histoire économique et sociale*, (Lamertin), Bruxelles. → 邦訳ピレンヌ (1970)
- Pirenne, H. (1929) *Histoire de Belgique*, t.1, (5^e éd.), (Lamertin), Bruxelles.
- Pirenne, H. (1933) *Histoire économique et sociale du moyen âge*, (Edition revue et mise à jour avec une annexe bibliographique et critique par H. Van Werveke, Paris, 1963). → 邦訳ピレンヌ (1956)
- Pirenne, H. (1939) *Les villes et les institutions urbaines*, 2 vols., (Alcan), Paris / Bruxelles.
- Planitz, H. (1940) “Kaufmannsgilde und städtische Eidgenossenschaft in niederfränkischen Städten im 11. und 12. Jahrhundert,” in *Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte, Germanistische Abteilung*, LX Band. → 邦訳ブラーニッツ (1959)
- Postan, M.M. (1927) “Credit in medieval trade,” in *The economic history review*, vol.1, p.234-261 (reprod. in Postan (1973) p.1-27).
- Postan, M.M. (1951) “The economic and political relations of England and the Hanse from 1400 to 1475,” in *Power* (1951) p.91-153.
- Postan, M.M. (1952a) /Rich, E.E. (eds.) *The Cambridge economic history of Europe*, vol.2: *Trade and industry in the middle ages*, (Cambridge UP), Cambridge / London / New York, (Second edition, 1987).
- Postan, M.M. (1952b) “The trade of medieval Europe: The North,” in Postan (1952a) p.119-256.
- Postan, M.M. (1957) “Partnership in English medieval commerce,” in *Studi in onore di Armando Sapori*, t.1, (Istituto Editoriale Cisalpino), Milan, p.519-549.
- Postan, M.M. (1973) *Medieval trade and finance*, (Cambridge UP), Cambridge / London / New York.
- Power, E.E. (1941) *The wool trade in English medieval history*, (Oxford UP), Oxford. → 邦訳パウア (1966)
- Power, E.E. (1951) /Postan, M.M. *Studies in English trade in the 15th century*, (New edition. Routledge library editions, London, 2006).
- Prak, M. (2008) “Preface: S.R. Epstein (1960-2007) and the guilds,” in Lucassen (2008) p.1-3.
- Reincke, H. (1943) “Die Deutschlandfahrt der flandrer während der hansischen Frühzeit,” in *Hansische Geschichtsblätter*, Jg. 67/68 (1942/43), p.51-164.
- Roding, J. (1996) /Van Voss, L.H. *The North Sea and culture (1550-1800)*, (Proceedings of the International Conference held at Leiden, 21-22 April 1995).
- Soly, H. (2008) “The political economy of European craft guilds: Power relations and economic strategies of merchants and master artisans in the medieval and early modern textile industries,” in Lucassen (2009) p.45-71.
- Stabel, P. (1993) “Décadence ou survie ? Economies urbaines et industries textiles dans les petites villes drapières de la Flandre orientale (XIV^e-XVI^e siècle),” in Boone (1993a) p.63-84.

- Stabel, P. (1997) *Dwarfs among giants. The Flemish urban network in the late Middle Ages* (Studies in urban social, economic and political history of the medieval and modern Low Countries, no.8), (Garand), Leuven / Apeldoorn.
- Stabel, P. (2007) “Brokering commerce, brokering culture in medieval Europe: The Low Countries and the German Hanse,” in *The Low Countries: Arts and society in Flanders and the Netherland: A Yearbook*, t.15, p.36-43.
- Stein, W. (1909) “Hansa,” in *Hansische Geschichtsblätter*, Jg. 35, p.53-113.
- Van der Wee, H. (1988) (ed.) *The rise and decline of urban industries in Italy and in the Low Countries (late middle ages-early modern times)*, (Leuven UP), Leuven.
- Van der Wee, H. (1990) (ed.) *Growth and stagnation in the urban network of the Low Countries (14th-18th centuries)*, (Workshop on Quantitative Economic History: research paper; 90.01), Leuven.
- Van Doosselaere, Q. (2009) *Commercial agreements and social dynamics in medieval Genoa*, (Cambridge UP), Cambridge.
- Van Houtte, J.A. (1953) “Les foires dans la Belgique ancienne,” in *Recueils de la Société Jean Bodin*, t.5: *La foire*, (Librairie encyclopédique), Bruxelles, p.175-207.
- Van Houtte, J.A. (1977a) *An economic history of the Low Countries 800-1800*, (Weidenfeld and Nicolson), London.
- Van Houtte, J.A. (1977b) “The apogee of trade and commerce in the middle ages,” in Van Houtte (1977a) p.32-47.
- Van Houte, J.A. (1982) *De geschiedenis van Brugge*, (Lanno), Tielt.
- Van Ommeren, H.R. (1978) *De koopmansgilderol van Deventer, 1249-1387* (Het Nederlands historisch genootschap; 3), (Nijhoff), 's-Gravenhage.
- Van Werveke, H. (1936) “Der flandrischen Eigenhandel im Mittelalter,” in *Hansische Geschichtsblätter*, Jg. 61, p.7-25.
- Van Werveke, H. (1953a) “*Hanse* in Vlaanderen en aangrenzende gebieden,” in *Handelingen van het genootschap “Société d’émulation” te Brugge*, t.90, p.5-42 (reprod., in Van Werveke (1968) p.60-87).
- Van Werveke, H. (1953b) “Les «statuts» latins et les «statuts» français de la Hanse flamande de Londres,” in *Bulletin de la commission royale d’histoire*, t.118, p.289-320.
- Van Werveke, H. (1958) “Das Wesen der flandrischen Hanse,” in *Hansische Geschichtsblätter*, Jg. 76, p.7-20 (reprod., in Van Werveke (1968) p.88-103).
- Van Werveke, H. (1965) “Die Stellung des Hansischen Kaufmanns dem Flandrischen Tuchproduzenten gegenüber,” in Aubin (1965) p.296-304.
- Van Werveke, H. (1968) *Miscellanea mediaevalia: Verspreide opstellen over economische en sociale geschiedenis van de Middeleeuwen*, (E. Story-Scientia), Gent.
- Vander Linden, H. (1896) *Les gildes marchandes dans les Pays-Bas au moyen âge*, (Clemm), Gent.

- Vercauteren, F. (1950) “Note sur la survivance de la Hanse des XVII villes du XV^e au XVI^e siècle,” in *Revue belge de philologie et d’histoire*, t.28, p.1078-1091.
- Viaene, A. (1964) /Stalpaert, H./Bourguigno, M. *Album Archivaris Jos. De Smet*, (Westvlaams verbond van kringen voor heemkunde), Brugge.
- Vinckier, R. (1983) *Ieper Tuindag. Zesde eeuwfeest*, (Stedelijke culturele raad), Ieper.
- Warnkönig, L.A. (1835) *Flandrische Staats- und Rechtsgeschichte bis zum Jahr 1305*, Bd.I, (Fues), Tübingen.
- Warnkönig, L.A. (1836a) / Gheldolf, A.E. *Histoire de la Flandre et de ses institutions civiles et politiques jusqu’à l’année 1305*, t.2, (Van Dale), Bruxelles (5 vols., 1835-1864).
- Warnkönig, L.A. (1836b) “Status de la Hanse flamande, dite de Londres,” in Warnkönig (1836a) p.506-511.
- Wyffels, C. (1951) *De oorsprong der ambachten in Vlaanderen en Brabant* (Verhandelingen van de koninklijke Vlaamse academie voor wetenschappen, letteren en schone kunsten van België, klasse der letteren, no.13), Brussel.
- Wyffels, C. (1960) “De Vlaamse Hanze van London op het einde van de XIIIde eeuw,” in *Handelingen van het genootschap “Société d’émulation” te Brugge*, t.97, p.5-30.
- Wyffels, C. (1962a) *Hanse. Grands marchands et patriciens de Saint-Omer*, (Société académique des Antiquaires de la Morinie), Saint-Omer.
- Wyffels, C. (1962b) “De Vlaamse handel op Engeland voor het Engelse-Vlaams konflikt van 1270-1274,” in *Bijdragen voor de geschiedenis der Nederlanden*, t.16, p.205-213.
- Wyffels, C. (1964) “Peiling naar de sociale stand van een aantal Brugse groothandelaars, inzonderheid op de Britse Eilanden (1270-1292),” in Viaene (1964) p.365-379.
- Wyffels, C. (1965) /De Smet, J. (eds.) *De rekeningen van de stad Brugge (1280-1319)*. Eerste deel: (1280-1302), Eerste stuk, (Koninklijke academie van België. Koninklijke commissie voor geschiedenis), Brussel.
- Wyffels, C. (1990) “Hanzen in westelijk Vlaanderen,” in *Jaarboek. De Franse Nederlanden*, t.15, p.170-185.
- Wyffels, C. (1991) “De Vlaamse hanzen opnieuw belicht,” in *Academiae Analecta. Mededelingen van de koninklijke academie voor wetenschappen, letteren en schone kunsten van België, klasse der letteren*, t.53, p.1-17.

邦語

- アールツ, E. (2005) (藤井美男監訳) 『中世末南ネーデルラント経済の軌跡——ワイン・ビールの歴史からアントウェルペン国際市場へ——』(アールツ教授講演会録)(九州大学出版会).
- 井上光子 (2002) 「デンマーク王国の海上貿易——遅れてきた重商主義国家——」 深沢 (2002a) p.317-347.
- カービー, D. (2011) / ヒンカネン, M. (玉木俊明他訳) 『ヨーロッパの北の海——北海・バルト海の歴

- 史——』（刀水書房）.
- 影山久人（1995）「（研究ノート）ドイツハンザ都市の人口と社会構造についての覚え書き」『京都外国語大学研究論争』XLIII, p.1-7.
- 影山久人（2006）「中世末期ウェンド（・ハンザ）諸都市の輸出商業について」『Problemata Mundi』（京都外国語大学）vol.15, p.31-37.
- 川口博（1988）『伝統と近代——西洋近代史の再検討——』（彩流社）.
- グライフ, A.（2009）（岡崎哲治／神取道宏監訳）『比較歴史制度分析』（NTT出版）. → Greif（2006）
- 斯波照雄（1997）『中世ハンザ都市の研究——ドイツ中世都市の社会経済構造と商業——』（剏草書房）.
- 斯波照雄（2010）『ハンザ都市とは何か——中近世北ドイツ都市に関する一考察——』（中央大学出版部）.
- 関谷清（1973）『ドイツ・ハンザ史序説』（比叡書房）.
- 高橋理（1974）「合同ハンザ成立以前におけるドイツ商人のイングランド貿易——『商人ハンザ』の研究として」『文化紀要』（弘前大学教養部）第8号, p.33-66.
- 高橋理（1980）『ハンザ同盟——中世の都市と商人たち——』（教育社）.
- 高橋理（1992）「成立期中世ハンザ都市ロストック（Rostock）——urbs から civitas への進展——」『山梨大学教育学部研究報告』（第一分冊 人文社会科学系）第43号, p.104-115.
- 高橋理（1993）「中世ハンザ都市ロストックの初期ラート」『山梨大学教育学部研究報告』（第一分冊 人文社会科学系）第44号, p.123-135.
- 高橋理（2013）『ハンザ「同盟」の歴史——中世ヨーロッパの都市と商業——』（創元社）.
- 高橋（小西）陽子（1982）「フランドル自己商業Eigenhandel衰退の影響——13世紀のガンに関して——」『史泉』（関西大学）第57号, p.83-98.
- 高橋陽子（1992）「サン＝トメールのハンザに関する一考察——13世紀を中心に——」『西洋史学』第164号, p.270-283.
- 高村象平（1959）『ドイツ・ハンザの研究』（日本評論新社）（筑摩書房 1980年）.
- 高村象平（1980）『ハンザの経済史的研究——西欧中世都市の研究2——』（筑摩書房）.
- 谷澤毅（2011）『北欧商業史の研究——世界経済の形成とハンザ商業——』（知泉書館）.
- 玉木俊明（2008）『北方ヨーロッパの商業と経済 1550-1815年』（知泉書館）.
- ティールホフ, M. v.（2005）（玉木俊明／山本大丙訳）『近世貿易の誕生——オランダの「母なる貿易」——』（知泉書館）.
- 寺村銀一郎（1988）「スウェーデンとドイツ・ハンザ——主権国家の誕生と異邦人の同化——」川口（1988）p.41-72.
- ド・フリース, J.（2009）／ファン・デア・ワウデ, A.（大西吉之／杉浦未樹訳）『最初の近代経済——オランダ経済の成功・失敗と持続力 1500-1815——』（名古屋大学出版会）.
- 西村由美子（1997）「12世紀フランドルの政治的転換期——暗殺・復讐そして反乱へ——」『史学雑誌』第106編第1号, p.64-82.

- 根本聡 (2000) 「16・17世紀スウェーデンの帝国形成と商業——バルト海支配権をめぐる——」『関西大学西洋史論叢』第3号, p.1-19.
- パイヤー, H.C. (1997) (岩井隆夫訳) 『異人歓待の歴史——中世ヨーロッパにおける客人厚遇、居酒屋そして宿屋——』(ハーベスト社). → Peyer (1987)
- パウア, E.E. (1966) (山村延昭訳) 『イギリス中世史における羊毛貿易』(社会科学ゼミナール35) 未来社. → Power (1941)
- 服部治彦 (1992) 『フランス近代貿易の生成と展開』(ミネルヴァ書房).
- ビュテル, P. (1997) (深沢克己/藤井真理訳) 『近代世界商業とフランス経済——カリブ海からバルト海まで——』(同分館).
- ピレンヌ, H. (1956) (増田四郎他訳) 『中世ヨーロッパ社会経済史』(一条書店). → Pirenne (1933)
- ピレンヌ, H. (1970) (佐々木克己訳) 『中世都市——社会経済史的試論——』(創文社). → Pirenne (1927)
- ピレンヌ, H. (1988a) (佐々木克己訳) 『中世都市論集』(創文社).
- ピレンヌ, H. (1988b) 「中世における都市、市場、及び商人」ピレンヌ (1988a) p.159-175. → Pirenne (1898)
- ピレンヌ, H. (1988c) 「12世紀以前のフランドル都市」ピレンヌ (1988a) p.177-205. → Pirenne (1905)
- 深沢克己 (2002a) (編) 『国際商業』(近代ヨーロッパの探求9) (ミネルヴァ書房).
- 深沢克己 (2002b) 『海港と文明——近世フランスの港町——』(山川出版社).
- 深沢克己 (2007) 『商人と更紗——近世フランス=レヴァント貿易史研究——』(東京大学出版会).
- 藤井美男 (1995) / 岡村明美 「西欧中世都市における商取引と外来商人——13世紀グラヴリンヌおよび14世紀メヘレンの場合——」『産業経営研究所報』(九州産業大学) 第27号, p.113-129.
- 藤井美男 (1998) 『中世後期南ネーデルラント毛織物工業史の研究』(九州大学出版会).
- 藤井美男 (2007a) 『ブルゴーニュ国家とブリュッセル——財政をめぐる形成期近代国家と中世都市——』(ミネルヴァ書房).
- 藤井美男 (2007b) 「中世都市ブリュッセルの市政構造——第三会派の形成と変容に至る過程——」『経済学研究』(九州大学) 第74巻第1号, p.57-93.
- プラーニッツ, H. (1959) (鯖田豊之訳) 『中世都市成立論——商人ギルドと都市宣誓共同体——』(未来社). → Planitz (1940)
- 守山記生 (1995) 『北フランス・ベルギー中世都市史研究』(近代文藝社).
- 諸田實 (1999) 「16, 17世紀におけるイギリス毛織物の輸入・仕上げ・販売——「ロンドン=アントウェルペン枢軸」の延長——」『商経論叢』(神奈川大学) 第35巻第2号, p.1-46.
- 山田雅彦 (2001) 『中世フランドル都市の生成——在地社会と商品流通——』(ミネルヴァ書房).
- [九州大学大学院経済学研究院 教授]